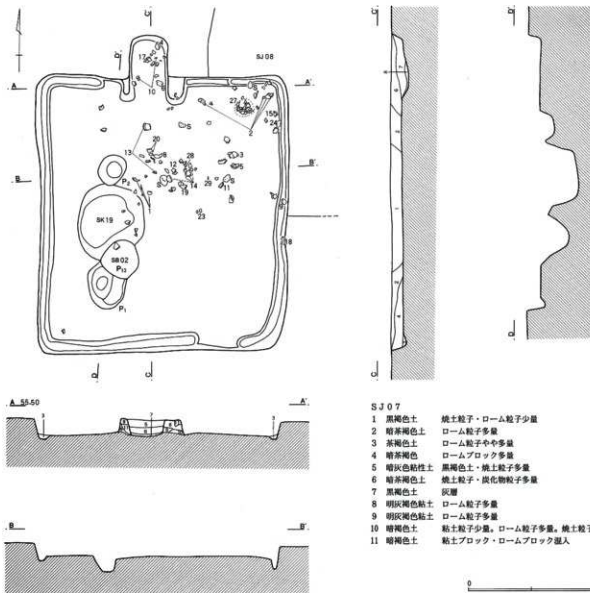


第24図 A区第7号住居跡



カマドは北壁に設けられる。燃焼部は壁を切り込むが、底面の掘り込みは浅い。第7層下面が火床面、第8層は掘り方と考えられる。袖は白色粘土を積み上げていた。ピットは2本検出されたが、対応するものは存在せず、主柱穴配置は不明である。

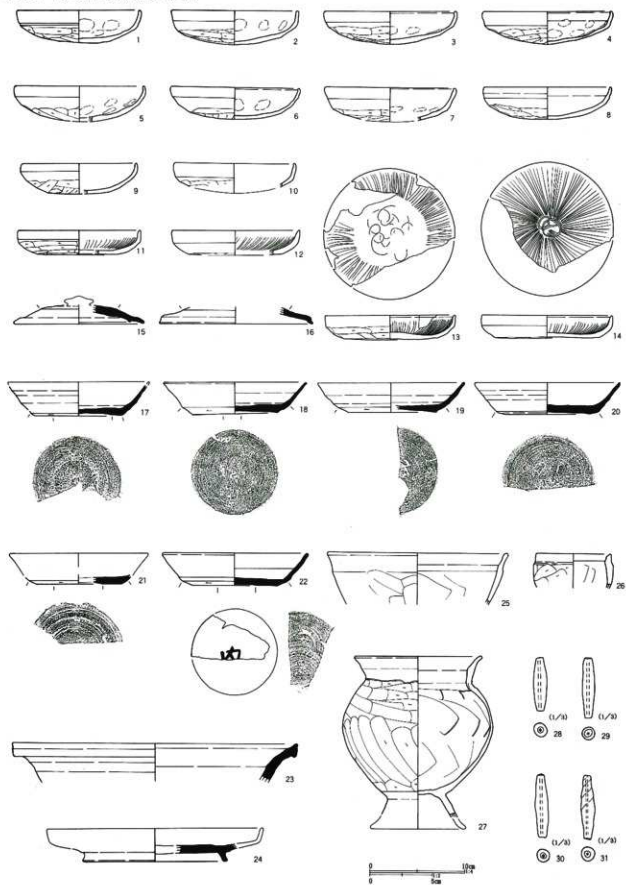
壁溝は南壁部に途切れる箇所があるが、他の部分は全周する。深さ5cm前後。

出土遺物は住居北半部からまとも検出されている。器種としては、土師器環・暗文環・鉢・小型壺・小型台付甕、須恵器環・蓋・甕・高台付盤などがある(第25図)。1~10は北武藏型環で、底部は丸

底であるが、やや扁平化している。11~14は平底暗文環。内面、螺旋+放射暗文を基本構成とするもので、平底暗文環出現段階の土器と考えられる。

15は須恵器かえり蓋。重複する第8号住居跡に帰属するものかもしれない。16は無かえり蓋。17~22は須恵器環である。口径は15cm代にまとなり、底部と体部下端がヘラケズリ調整される。17は底部ヘラ切り、18は不鮮明であるが、静止糸切りの可能性がある。21・22は回転糸切りである。胎土から17~21は末野産、22は南比企産である。22は底部外面に「内」の墨書が記されている。24は高台の盤である。

第25图 A区第7号住居跡出土遺物



第9表 A区第7号住居跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	12.9	3.4		AB	A	橙褐色	80%	No59-60他・覆土、Pit2、覆土下層
2	土師環	13.2	3.5		ABC	A	褐色	95%	No19-78
3	土師環	13.8	3.5		BD	B	褐色	80%	No27-28、床面、釜みあり
4	土師環	(13.4)	3.4		AB	B	褐色	40%	カマド内No1
5	土師環	13.5	3.7		AB	B	褐色	50%	No29、床面
6	土師環	(13.5)	3.4		ABD	A	茶褐色	60%	No92、覆土
7	土師環	(13.6)	2.4		AB	B	淡褐色	25%	覆土
8	土師環	13.3	3.4		AB	A	褐色	75%	No54、覆土上層
9	土師環	(12.0)	3.2		BD	B	橙褐色	25%	No86、覆土
10	土師環	(12.6)	2.5		AB	A	褐色	40%	No5-90 カマド内
11	土師暗文環	(12.8)	2.5		ABD	A	橙褐色	25%	No32、覆土、内面放射暗文、磨減少ない
12	土師暗文環	(13.4)	2.6	(9.8)	ABD	A	褐色	25%	No45、覆土
13	土師暗文環	(13.7)	2.6	(9.9)	BCD	A	橙褐色	65%	No15-57、覆土、内面放射暗文
14	土師暗文環	13.7	2.4	11.0	BC	A	茶褐色	65%	No41-46、覆土下層、内面放射暗文
15	須恵蓋	(13.6)	2.0		BD片	C	褐色	20%	No80、覆土下層、末野産、かえり径10.8cm。
16	須恵蓋	(16.0)	2.7		BC片	A	暗褐色	5%	覆土、末野産。
17	須恵環	(15.0)	3.2	9.2	CE片	B	灰色	50%	No4カマド内、末野産。底部A3d手法
18	須恵環	15.1	3.3	9.0	BE片	B	褐色	65%	No87、壁溝、末野産。底部B3c手法
19	須恵環	(15.4)	3.1	9.0	BC片	C	黄灰色	35%	No42、覆土、末野産。底部+体下部回転ヘラクスリ
20	須恵環	(15.2)	3.3	9.0	CE片	A	暗灰色	35%	No50-53、覆土、末野産。底部3c手法
21	須恵環		1.0	(9.0)	C片	B	褐色	30%	カマド内、末野産。底部B3d手法
22	須恵環	(15.2)	3.4	(9.0)	BC針	B	淡灰色	20%	覆土。南比企産。外底部「内」の圖書あり。
23	須恵甕	(30.0)	4.1		B片	C	灰褐色	5%	No71、覆土、末野産
24	須恵高台盤		1.9	(14.6)	BC片	A	灰色	30%	No83、床面、末野産。底部全面回転ヘラクスリ
25	土師鉢	(18.8)	5.5		AB	B	暗褐色	20%	覆土
26	土師小型甕?	(7.8)	3.6		AB	A	橙褐色	20%	覆土
27	土師台付甕	13.2	16.9		ABC	A	茶褐色	75%	No25、床面
28	土師	No38、長さ4.2cm、最大径1.1cm、孔径0.2cm、重さ4.3g。胎土B、焼成A、褐色。残存95%							
29	土師	No34、長さ4.7cm、最大径1.0cm、孔径0.2cm、重さ4.5g。胎土B・C、焼成A、褐色。残存100%							
30	土師	覆土。長さ5.0cm、最大径1.0cm、孔径0.2cm、重さ5.0g。胎土B、焼成A、褐色。残存100%							
31	土師	覆土。長さ5.0cm、最大径1.1cm、孔径0.2cm、重さ5.3g。胎土B、焼成A、褐色。残存100%							

須恵器は破片数で71点出土し、内訳は環40・高台付環1・蓋16・高台盤2・甕8・壺瓶類3・不明1点である。環6点が南比企、環1点と蓋3点が産地不明で、それ以外は末野産である。時期は熊野Ⅲ期古相と考えられる。

#### A区第8号住居跡 (第26図)

第8号住居跡は46-8・9、47-8・9グリッドに位置する。第7号住居跡、第2号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が古い。遺構の大半は町教育委員会調査区にあり、住居南西部を調査した。平面形は方形の大型住居跡の一部で、残存規模は長軸長6.00m、短軸長3.58m、深さ0.24mである。主軸方位はN-92°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、比較的堅く締まっていたが、

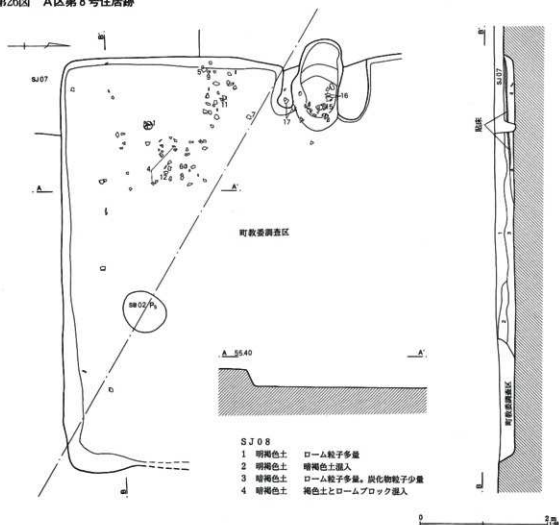
壁際はやや軟弱であった。埋土はローム粒子が多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは西壁に付く。袖の一部を除き、町教育委員会調査区に属する。ピット・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少なく、小片が多い。土師器環・皿・暗文環・甕、須恵器環・高台付環・蓋・甕と不明土製品がある(第27図)。1は遺存度の高い土師器環であるが、覆土出土で、器形からも重複する第7号住居跡に属する可能性が高い。2は内脛口縁の北武蔵型環。3は暗文環系の土器であるが、暗文は施されない。4は皿、5・6は暗文環である。

7-11は須恵器蓋で、かえりをもつものもたないものがある。末野産。12・13は末野産の須恵器環、

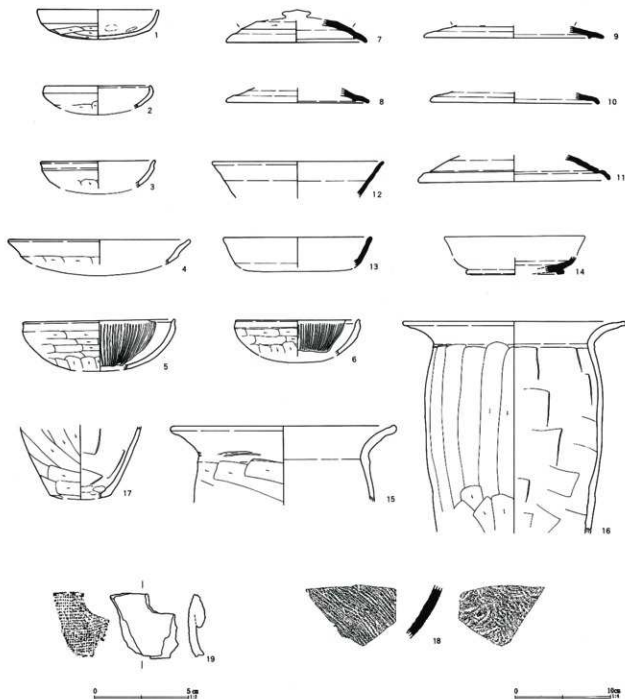
第26図 A区第8号住居跡



第10表 A区第8号住居跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	12.7	3.1		ABC	B	明褐色	60%	No60. 覆土
2	土師環	(11.0)	2.4		AB	A	橙褐色	15%	覆土
3	土師環	(12.0)	2.8		AB	B	褐色	20%	覆土
4	土師皿	(19.0)	2.6		AB	A	橙褐色	20%	No46-55. 覆土. 接合しない2片からなる
5	土師暗文環	(16.0)	5.2		AB	A	橙褐色	20%	No12. 覆土. 内面放射暗文
6	土師暗文環	13.0	3.7		A	A	灰褐色	20%	No37. 覆土. 内面放射暗文
7	須恵蓋	(14.7)	2.3		C片	C	灰色	15%	No2. 床面. 未野産. かえり径12.3cm
8	須恵蓋	(15.0)	1.5		BD片	C	灰褐色	10%	覆土. 未野産. かえり径12.3cm
9	須恵蓋	(18.8)	1.3		C片	C	灰褐色	5%	No11. 覆土. 未野産. かえり径16.0cm
10	須恵蓋	(17.6)	1.1		BC片	A	灰色	5%	カマF 覆土. 未野産. 口径. 傾き不明確
11	須恵蓋	(20.0)	2.7		C片	C	黄灰色	20%	No7. 覆土. 未野産
12	須恵環	(18.0)	3.9		C片	A	暗灰色	5%	No77. 床面. 未野産
13	須恵蓋	(15.5)	3.2		BC片	A	灰色	5%	覆土. 未野産
14	須恵高合付環		1.8	(9.2)	B	A	灰色	5%	覆土. 湖西産. 底部は出尻となるか不明確
15	土師甕	(23.4)	8.1		AC	A	明褐色	20%	カマF内No83
16	土師甕	(23.3)	22.2		AC	A	明褐色	20%	カマF内No86-87他. 歪みあり
17	土師甕		7.7	6.5	ABD	B	褐色	40%	カマF左袖No1-3他
18	須恵甕				BC片	A	灰色		覆土. 未野産か
19	不明土製品	残長3.4cm. 表面は湾曲し細かい布目痕残る 裏面粘土練み上げ痕残る 表面ひびがあり型押し成形かもしれない							

第27図 A区第8号住居跡出土遺物



14は湖西産の高台付杯である。

土師器甕は口縁部上端をヨコズリするもの(15)と、胴部をタテズリするもの(16)がある。19は不明土製品で、表面に細かい布目痕が押圧され、裏面は粘土積み上げ痕が残る。

須恵器は破片数で35点出土し、内訳は坏19点・碗2・高台坏1・蓋9・甕3・壺1点となる。産地は

南比企産2点(坏1・蓋1)、湖西産1点(高台付坏)、不明2点(甕1・壺1)でそれ以外は未野産で占められている。第7号住居跡との関係や出土遺物の様相から、時期は熊野Ⅱ期が相当と考えておきたい。

A区第9号住居跡(第28図)

第9号住居跡は47-10グリッドに位置する。住居北半は町教育委員会によって調査されている。重複

する第21号土壇及び1号ピット列は本住居跡を切って構築されていた。

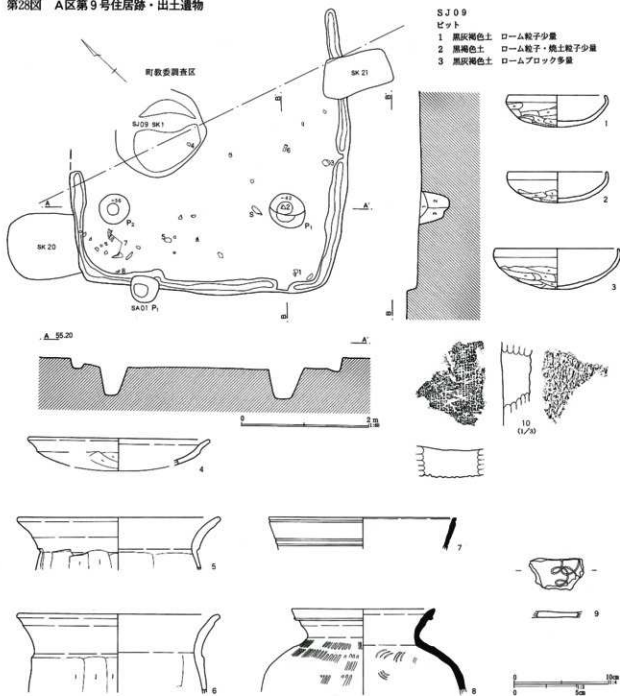
平面形は長方形と推定され、調査区内の残存規模は長軸長4.40m、短軸長3.72m、深さ0.22mである。主軸方位はN-51°-Eを指す。

床面は細かい凹凸が目立つが、全体に堅く締まっていた。埋土はローム粒子を少量含む黒褐色土を基

調とし、特に埋め戻されたような痕跡は認められなかった。

カマドは調査区内からは検出されなかった。ピットは2本検出され、住居に伴う主柱穴と考えられる。土壇は1基検出され、床下土壇となる可能性がある(SK1)。壁溝は一部途切れるが、ほぼ全周する。深さは5cmほどである。

第28図 A区第9号住居跡・出土遺物



第11表 A区第9号住居跡出土遺物観察表 (第28図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	10.3	3.3		AB	A	茶褐色	50%	No2. 覆土。
2	土師環	(10.4)	3.2		ABC	A	明褐色	30%	Pit1上面
3	土師環	(13.0)	4.3		AB	B	橙褐色	35%	No6. 覆土。内面風化。粉っぽい胎土
4	土師皿	(19.0)	2.8		ABD	A	褐色	5%	No30 床直
5	土師甕	(21.0)	5.6		ABC	A	褐色	20%	No14. 覆土
6	土師甕	(21.0)	8.4		ABC	A	淡褐色	10%	No7 床直
7	須恵碗	(19.8)	3.4		C/F片	B	淡灰色	10%	No28. 覆土。未野産。無台輪か
8	須恵甕	(15.0)	9.1		C片	A	黒灰色	30%	No18-19. 覆土。未野産
9	土師暗文環				B	A	橙褐色		畿内系暗文環。底部外面は指頭痕残る
10	平瓦				C	A	褐色		凸面縄叩き凹面布目 (995本、977本/cm)

出土遺物は土師器環・皿・甕・畿内産暗文環、須恵器碗・壺、平瓦が検出された。第28図1～3は丸底形態の北武蔵型環。4は皿、5・6は甕で、胴部は縦方向のヘラケズリが施される。7は口唇部と体部と沈線が巡り、銅鏡模倣の須恵器碗と思われる。未野産。9は畿内産土師器環の底部破片。胎土は精選され、外面は指頭による窪みと軽いヘラケズリ痕があり、内面は螺旋状暗文が施されている。覆土出土。10は平瓦小片。凸面縄叩き、内面布目である。覆土出土。

須恵器は22片出土している。坏11点(未野8・南比企2・不明1点)、碗1点、甕5点、蓋4点、器種不明1点があり、未野産が19点を占める。

土師器環や甕の様相から、時期は熊野I期と考えられる。

## A区第10号住居跡 (第29図)

第10号住居跡は47・48-9・10グリッドに位置する。上層を浅い溝状遺構(第2・5号溝跡の一部か)によって攪乱されていたが、床面は残存している。また、住居中央部にピットが1基検出された。住居より新しい時期の所産である。(SA01)。

平面形はほぼ正方形で、規模は長軸長3.60m、短

軸長3.46m、深さ0.12mである。主軸方位はN-47°-Wを指す。

床面は凹凸が比較的顕著であるが、良く踏み固められている。埋土はローム混じりの黒褐色土を基調としているが、攪乱を受けており堆積状況は不明確である。

カマドは北西壁に設置される。燃焼部は壁を切り込み、手前が土塊状に一段深く掘り込まれていた。遺存状態は悪く、カマド袖の大半は流失した状態であった。

貯蔵穴はカマド脇の北隅部に設けられていた。長径65cm、短径55cmの楕円形で、深さ51cmである。柱穴は検出されなかった。壁溝はカマドと貯蔵穴の周囲を除き、概ね巡っていた。

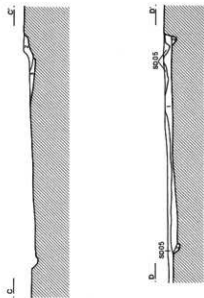
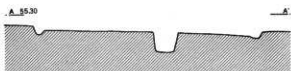
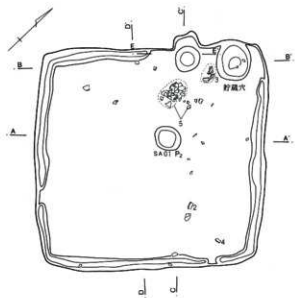
出土遺物は土師器環・皿?・甕・壺、須恵器盤がある(第29図1～5)。1は土師器皿か。貯蔵穴出土。3の甕と5の壺はカマド前面から潰れた状態で出土した。

須恵器は12片出土したが、いずれも小片である。坏は3点(未野産2・南比企産1)、甕は5点(未野4・南比企1)、蓋は1点(未野)、盤2点(未野)、甌1点(南比企)である。

第12表 A区第10号住居跡出土遺物観察表 (第29図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師皿?	(14.7)	2.8		AB	A	明褐色	10%	貯蔵穴
2	土師環	(16.4)	4.0		BE	A	明褐色	20%	No23
3	土師甕	(22.6)	8.6		AB	A	褐色	25%	No3
4	須恵盤	(24.5)	2.4		E片	A	暗灰色	10%	No25. 未野産
5	土師壺		28.0	8.4	ABC	A	橙褐色	65%	No4-9

第29図 A区第10号住居跡・出土遺物



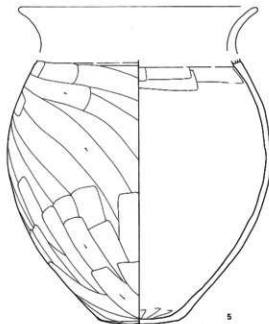
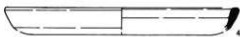
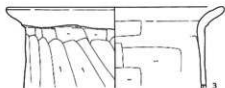
SJ 10

- 1 黒褐色土 ロームブロック少量  
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックやや多量

カマド

- 1 明褐色土 ローム粒子・焼土粒子  
2 黒褐色土 明褐色土・ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子  
3 黒褐色土 焼土多量・炭化物  
4 白色粘質土 焼土粒子・ローム粒子  
5 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量

0 2m



0 2m



時期は熊野Ⅰ～Ⅱ期と考えておきたい。

#### A区第11号住居跡 (第30図)

第11号住居跡は48・10グリッドに位置する。第10号住居跡の南東に隣接し、ほぼ軸を揃えている。埋土上面は第1・2・9・43号溝跡によって削平されている。平面形は横長の長方形で、規模は長軸長4.20m、短軸長2.94m、深さ0.22mである。主軸方位はN-50°-Wを指す。

床面は細かな凹凸が目立ち一定しない。また、西半部では溝跡の攪乱が床面まで達しており、床面の遺存状態は悪い。埋土はロームブロック混じりの黒色土を基調としていた。

カマドは北西壁に設けられていた。袖は白色粘土を用いて構築されているが、遺存状態は良くない。左袖には土師器甕が倒立状態で埋め込まれていた。袖の補強材であろう。貯蔵穴はカマド脇の北隅部に掘り込まれていた。形態は楕円形で、規模は長径58cm、短径48cm、深さ12cmである。

ピットは検出されなかった。壁溝は長辺で部分的に途切れていた。

出土遺物は土師器環・皿・暗文皿・甕・小型甕、須恵器高盤脚部?・甕、平瓦がある(第30図1~10)。1は完形の坏で、貯蔵穴内出土。口縁部が内彎する北武蔵型坏である。3は皿で内面に放射暗文が施される。7はカマドの補強材に使用された甕、8はカマド脇から出土した。器壁の厚い甕で、胴部調整は縦方向のケズリが基本となっている。10は平瓦片。厚さ2cm前後と分厚い。凸面は平行タタキ、凹面は

細かい布目(経糸8本、緯糸8本/cm)痕が残る。横骨は残存部には確認できない。覆土出土で、混入の可能性が高いであろう。

須恵器は11片出土し、坏が6点(末野5・不明1)、甕が1点(末野)、瓶類2点(末野1・南比企1)、蓋1点、盤?1点(末野)となる。

時期は熊野Ⅰ～Ⅱ期と考えられる。

#### A区第12号住居跡 (第31図)

第12号住居跡は調査区南端の48・9・10グリッドに位置する。北側に第10・11号住居跡がほぼ軸を揃えて隣接している。住居上面を第1・7・8号溝跡に削平されていた。平面形は整った方形で、規模は長軸長3.66m、短軸長3.60m、深さ0.30mである。主軸方位はN-54°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、堅く踏み固められていた。埋土は第3層が焼土を主体に構成される層で、明らかに投棄されたものと思われる。第2・4層にも焼土粒子の混入が目立った。対照的に第5~10層には焼土がほとんど含まれていない。

カマドは北西壁に設置される。燃焼部は壁を僅かに切り込み、底面は皿状に掘り込まれていた。ピットは検出されなかった。

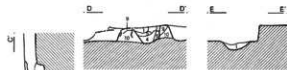
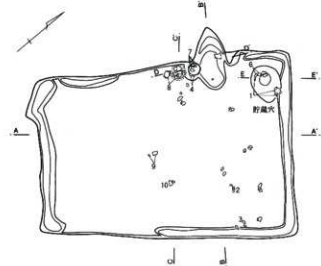
壁溝は一部途切れている。深さ約5cm。

出土遺物は極めて多い(第32~36図)が、全て破片である。大半の遺物が、第2層・3層対応層から出土しており、焼土と共に投棄されたものと考えられる。器種としては、土師器環・暗文環・皿・椀・

第13表 A区第11号住居跡出土遺物観察表(第30図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	10.8	3.2		ABC	A	明褐色	100%	No1-3, 4. 貯蔵穴
2	土師環	(12.6)	2.7		BC	A	褐色	25%	No31. 覆土
3	土師暗文皿	(19.6)	2.0		ABC	A	明褐色	5%	No36. 覆土。内面放射暗文
4	土師皿	(19.6)	3.8		ABC	A	明褐色	20%	No48. カマド袖
5	須恵高盤脚部		1.7	(12.7)	BD片	B	灰褐色	10%	カマド。末野産
6	土師小型甕	(14.9)	14.0		ABE	A	暗褐色	35%	No1 貯蔵穴
7	土師甕	22.0	15.2		ABD	A	明褐色	75%	No47 カマド袖
8	土師甕	(20.9)	21.0		AB	A	暗褐色	40%	No13-43. 覆土
9	須恵甕				E片	A	暗灰色		No40-41. 床面。末野産
10	平瓦				BDE	B	褐色		No30. 覆土。凹面布目凸面平行叩き

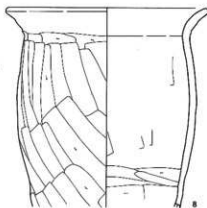
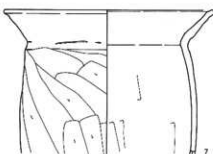
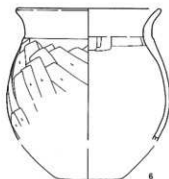
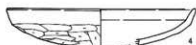
第30図 A区第11号住居跡・出土遺物



S J 1 1

- 1 黒褐色土 ロームブロック
- 2 黒褐色土 ローム粒子微量
- 3 黒褐色土 ローム粒子少量
- カマド
- 1 黒褐色土 炭化物・焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 白色粘質土 焼土粒子少量
- 3 白色粘質土・黒褐色土 炭化物・焼土粒子・ローム粒子少量
- 4 黒褐色土 炭化物多量、焼土粒子少量
- 5 白色粘質土 黒褐色土含む
- 6 暗褐色土
- 7 黒褐色土 炭化物多量、ローム混入
- 8 白色粘質土 焼土粒子少量
- 9 黒褐色土 白色粘質土
- 10 白色粘質土 焼土粒子多量
- 貯蔵穴
- 1 黒褐色土 ローム粒子少量

0 2m



9 (1/3)



10 (1/3)



0 10cm

暗文皿・甕・壺・甌・小型甕・板状土製品、須恵器長頸瓶・短頸壺・蓋・杯・円面碗・盤部・甕、土製支脚、土錘、鉄製品がある。第32図1～4は内縁口縁の北武蔵型環。5～7は器形は暗文環と同一であるが、内面の暗文は施されない。8・10～21は暗文環。見込部から口縁に向かって放射状暗文が施されるものが大半であるが、19は斜格子状暗文が施文されている。14の暗文は間隔を置いて施される。22～25は北武蔵型土師器皿、27～31は暗文皿である。27・31は放射状暗文が施されるが、31は不鮮明である。28・30は螺旋暗文、29はあまり明確ではないが、螺旋暗文が崩れたような円形文様を不規則に施文しているようにみえる。32は内面に朱墨かとも思われる痕跡が認められるが、字には読めない。33～42は甕。胴部器壁の厚いものと薄いものがある。胴部の膨らみは弱く、縦方向のケズリを加えるものが多い。53は板状土製品。土器のような丸味はなく、側面は

タテ・ヨコ2面が面取りされている。表面は軽いヘラケズリ、裏面は撫でられている。土師質で、硬質な焼き上がり。置きカマドか。

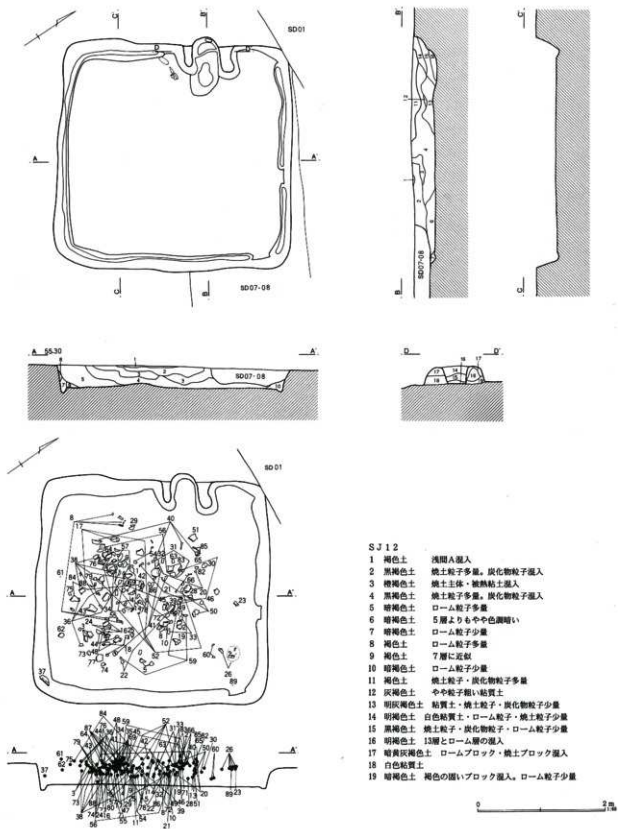
54～57は須恵器壺・瓶類である。54は徳利形の細頸短頸瓶か。胴部は木口状工具によるカキ目が施されている。肩部内面が強く窪み、この部分で接合したものか。末野産。55・56は湖西産の長頸瓶。58～71は須恵器蓋。58～61は中小形のかえり蓋で、58は秋間産と思われる。天井部が全面回転ヘラケズリされ、かえりが突出する。長頸瓶の蓋か。62～66は大型のかえり蓋、67・68は無かえり蓋である。58以外は末野産。

72～80は須恵器環。72～74は小型環で、72・73は底部手持ちヘラケズリ、74はヘラ切り後ナデ調整である。76～79は口径15.8～18.6cmの大型環である。76は底部ヘラ切り後外縁部のみ回転ヘラケズリ調整。中心部にはヘラ切り痕が残る。77～79は底部全面回

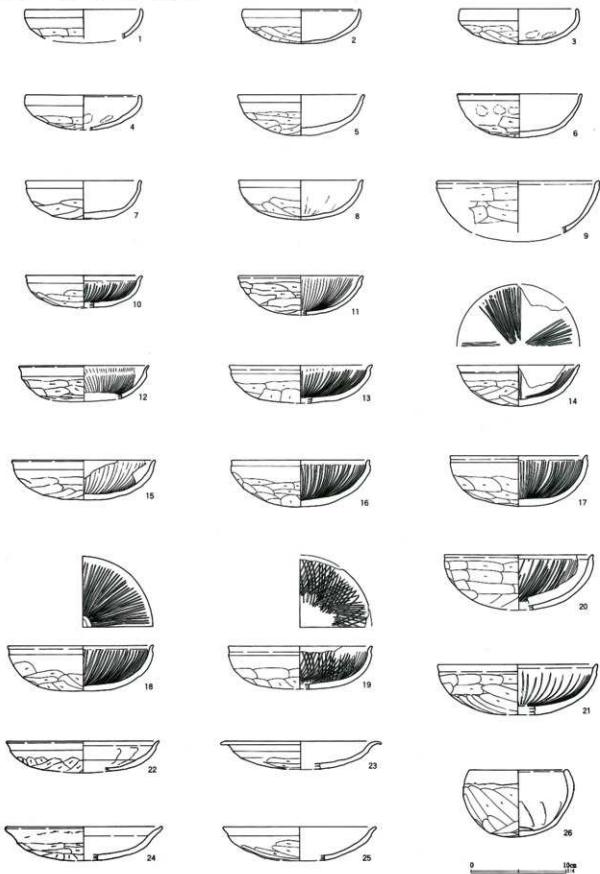
第14表 A区第12号住居跡出土遺物観察表(第32～36図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(12.2)	3.1		AB	B	淡褐色	25%	覆土。外面風化
2	土師環	12.3	3.6		ABD	A	明褐色	50%	No2075・2076
3	土師環	12.3	3.7		AB	B	淡褐色	70%	No181・1116他
4	土師環	12.0	3.7		AB	B	褐色	50%	No718・1783
5	土師環	(13.3)	4.3		AB	B	褐色	40%	No2047・2048
6	土師環	(13.0)	4.6		BD	A	淡褐色	25%	覆土。口縁外面黒斑
7	土師環	(12.0)	4.0		AD	A	黄褐色	40%	No1385・1718
8	土師暗文環	(13.0)	4.2		AB	B	明褐色	30%	No2152・2173。内面風化
9	土師碗	(17.0)	5.5		ABD	A	褐色	10%	No2004
10	土師暗文環	(12.2)	3.4		AB	A	明褐色	45%	No2154
11	土師暗文環	(13.0)	4.1		B	A	明褐色	20%	No1791。内面放射状暗文
12	土師暗文環	(13.6)	3.5		B	A	茶褐色	25%	覆土。内面放射暗文
13	土師暗文環	(15.0)	4.0		AB	A	明褐色	35%	No1682
14	土師暗文環	12.9	4.3		AB	A	淡褐色	75%	No1床面。No1780。内面放射暗文。4単位施文
15	土師暗文環	15.0	4.2		BD	B	明褐色	30%	覆土。内面放射暗文
16	土師暗文環	14.5	4.9		AB	A	淡褐色	65%	No187・2033他
17	土師暗文環	14.3	5.4		ABD	B	淡褐色	90%	No410・1706他。全体にやや風化
18	土師暗文環	14.8	4.8		AB	A	明褐色	70%	No1535・1582
19	土師暗文環	(15.0)	4.5		AB	A	明褐色	35%	No1560
20	土師暗文環	(15.6)	5.8		ABD	A	明褐色	30%	No29・116
21	土師暗文環	(16.8)	5.3		ABD	A	淡褐色	40%	No1698・1819
22	土師皿	(16.0)	3.2		B	A	茶褐色	30%	No204・2158。暗文系無文皿
23	土師皿	(16.0)	3.0		ABC	B	淡褐色	10%	No1474
24	土師皿	(16.4)	3.6		ABD	B	橙褐色	25%	No2114・2035
25	土師皿	(16.0)	3.6		AB	A	明褐色	40%	No1593
26	土師碗	10.2	7.1		AB	B	褐色	65%	No161・163他。体部外面二次被熱。部分的に煤付着

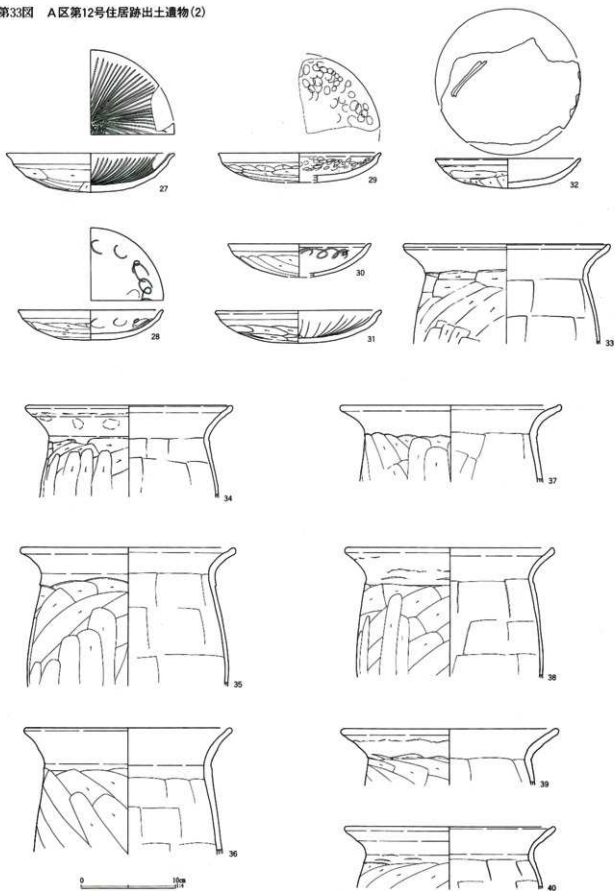
第31図 A区第12号住居跡・遺物分布図



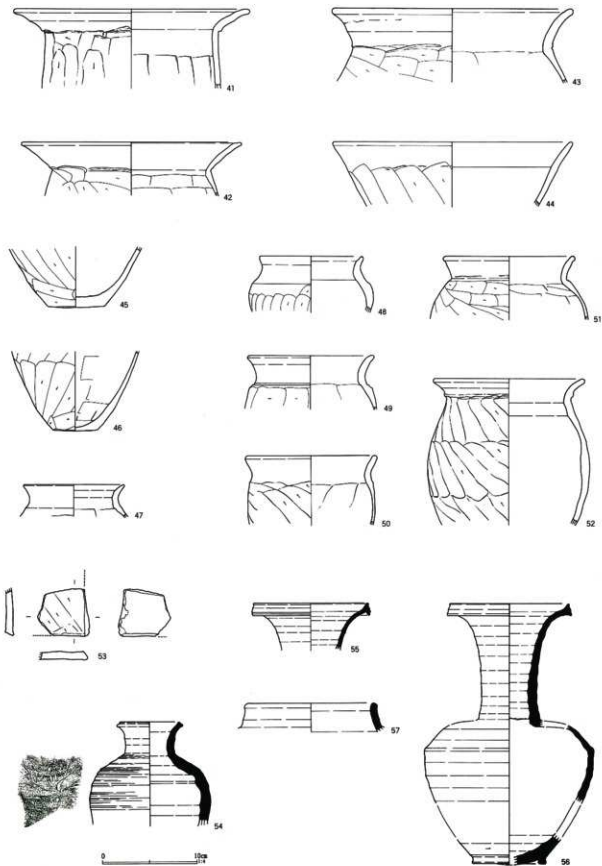
第32图 A区第12号住居跡出土遺物(1)



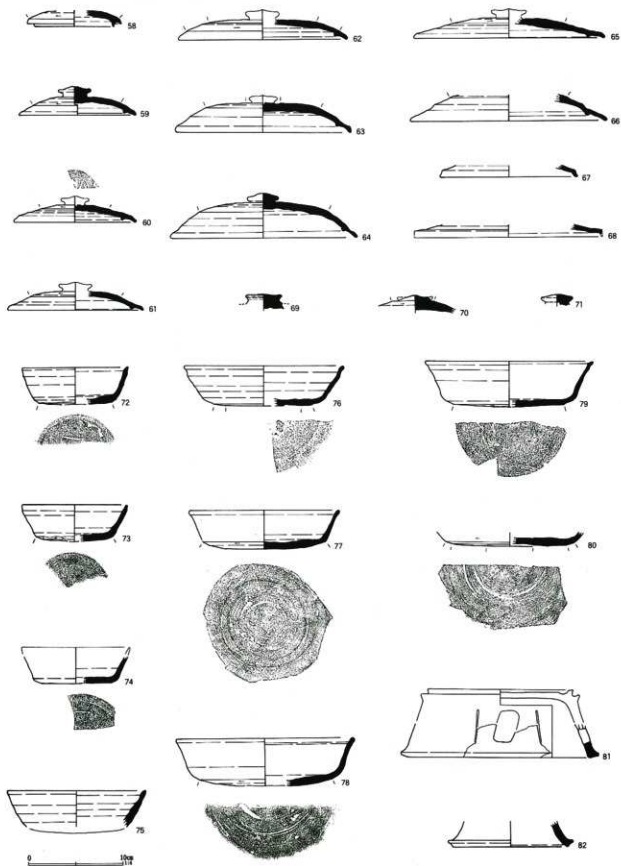
第33图 A区第12号住居跡出土遺物(2)



第34图 A区第12号住居跡出土遺物(3)

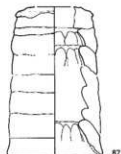
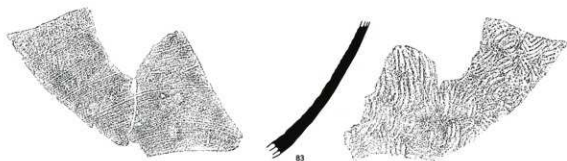


第35图 A区第12号住居跡出土遺物(4)





第36图 A区第12号住居跡出土遺物(5)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
27	土師暗文皿	(17.6)	4.1		A B C	A	明褐色	40%	覆土。内面放射暗文
28	土師暗文皿	15.2	3.1		A B	A	明褐色	75%	No.8. 床面。内面暗文部分に残る
29	土師暗文皿	(17.0)	3.1		A B C	A	明褐色	25%	No.1709
30	土師暗文皿	(15.0)	3.5		A B	A	明褐色	25%	No.1616
31	土師暗文皿	17.4	3.4		A B	B	褐色	60%	No.1647・2087。内面中央部一方向のヘラミガキ
32	土師皿	(15.2)	3.1		A B D	B	明褐色	50%	No.2088。内面「一」状に暗赤色顔料塗彩 朱書か
33	土師甕	(21.5)	10.5		B C D G	A	褐色	25%	No.2136・1690。
34	土師甕	21.4	9.6		A B D	A	淡褐色	25%	No.1863・1875他。
35	土師甕	22.4	14.7		A B	A	淡褐色	70%	No.1742・1805他。口縁部全周
36	土師甕	(21.6)	13.4		A B C	A	褐色	25%	No.128・753他。
37	土師甕	22.8	8.1		A B G	A	褐色	25%	No.1566
38	土師甕	(21.8)	13.7		A C	A	明褐色	35%	No.1728・1736他。
39	土師甕	(22.4)	6.0		A B	A	褐色	25%	No.2 (床)
40	土師甕	(21.8)	6.6		A B C	A	明褐色	50%	No.1608・1611他。委みあり
41	土師甕	(24.2)	8.3		B G	B	褐色	20%	No.197・2143他。
42	土師甕	(22.9)	5.6		A B	A	褐色	25%	No.54
43	土師壺	(25.0)	7.7		A	A	褐色	25%	No.2111
44	土師甕	(25.0)	6.8		A C	A	明褐色	25%	No.6・149
45	土師甕		6.3	6.0	A B	A	明褐色	60%	No.1200・1436
46	土師甕		8.5	4.8	A C	A	褐色	40%	No.1649・1664他。
47	土師小型甕	(10.6)	3.3		A B	B	褐色	30%	No.1917。外面二次被熱
48	土師小型台付甕	10.6	5.9		A B D	A	褐色	60%	No.188・193。外面僅付着
49	土師小型台付甕	(13.0)	5.7		A B	B	褐色	45%	No.4 (床)
50	土師小型甕	13.6	7.2		A B G	B	褐色	40%	No.1669・1992。
51	土師小型台付甕	(13.4)	6.7		A B D	B	淡褐色	25%	No.1606
52	土師小型甕	(15.6)	15.4		B C D	A	褐色	35%	No.1833・1902他。外面二次被熱
53	土師陶彩土製品	覆土。長さ5.0cm。幅5.4cm。厚さ7~9mm。胎土A B C。				焼成A。	褐色。	土師甕で型織	
54	須恵細頸短頸壺	6.2	11.0		C片	C	灰黒色	60%	No.886・1821。未野産。肩部で接合か
55	須恵長頸瓶	(12.0)	5.0		H	A	灰色	25%	No.2119。湖西産。内面自然降灰
56	須恵長頸瓶	12.5	(27.4)	7.6	F	A	灰色	25%	No.1713・2082。湖西産。3片あり接合しない
57	須恵短頸壺	(13.0)	3.0		C片	A	暗灰色	10%	No.1721。未野産
58	須恵蓋	(10.0)	1.6		B	A	淡灰色	15%	覆土上層。秋間産か。かえり径8.4cm
59	須恵蓋	12.2	3.0		C片	A	灰色	80%	No.324・551他。未野産。かえり径10.0cm
60	須恵蓋	(12.7)	1.8		C片	B	灰色	25%	No.1555・1556。未野産。かえり径10.0cm
61	須恵蓋	(14.2)	2.0		C片	B	灰色	10%	No.71。未野産。かえり径12.0cm
62	須恵蓋	(17.6)	2.1		C片	A	茶褐色	15%	No.1570。未野産。かえり径15.2cm。つまみ欠失
63	須恵蓋	(18.4)	3.1		C片	A	暗青灰色	30%	No.2091。未野産。かえり径15.5cm。つまみ欠失
64	須恵蓋	(19.6)	4.7		C片	A	紫灰色	30%	No.1719。未野産。かえり径17.0cm。わずら回転
65	須恵蓋	(20.0)	2.2		B C片	B	灰色	15%	No.277。未野産。かえり径16.8cm
66	須恵蓋	(20.6)	2.7		C片	A	灰色	20%	No.1420・1422他。未野産。かえり径16.8cm
67	須恵蓋	(14.3)	1.2		C片	C	灰色	5%	覆土。未野産。中小型の無かえり蓋
68	須恵蓋	(19.8)	1.3		C	B	灰色	5%	覆土。未野産か。口径やや不安定。大型の無かえり蓋
69	須恵蓋		1.6		B C	B	灰色	90%	No.1784。未野産。つまみ径3.9cm
70	須恵蓋		1.9		C片	B	黄灰色	80%	覆土。未野産
71	須恵蓋		1.2		B C片	B	灰色	90%	No.1689。未野産。つまみ径3.4cm
72	須恵環	(11.0)	3.9	(7.8)	C片	A	灰色	40%	No.3(床)。未野産 底部2 a手法
73	須恵環	(11.0)	3.8	8.2	C片	A	暗灰色	25%	No.1572。未野産 底部2 a手法
74	須恵環		2.8	(7.2)	B C片	A	灰褐色	20%	No.1574。未野産 底部A 1 a手法
75	須恵環	(14.5)	3.8		C片	A	灰色	10%	No.1136。未野産
76	須恵環	(16.7)	4.2	(10.2)	C片	B	暗灰色	15%	No.516・799。未野産。底部A 3 b手法
77	須恵環	(15.8)	4.1	13.0	C片	A	灰色	55%	No.1573。未野産 底部3 a手法
78	須恵環	(18.6)	5.0		C片	C	黄灰色	30%	No.2016・2018他。未野産。底部3 a手法
79	須恵環	(17.6)	4.8	(11.6)	B D片	B	暗黄灰色	35%	No.1741・1749他。未野産。底部3 a手法
80	須恵環		1.5	12.2	C片	B	淡灰色	45%	No.1882。未野産。底部A 3 c手法

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
81	須恵円面硯		3.4	(21.0)	B片	A	灰色	15%	覆土、S J 63と接合。未野産。方形透し・別み加飾
82	須恵脚付盤		2.7	(12.0)	B C片	A	青灰色	15%	No19。未野産。瓶か盤脚部か
83	須恵壺				C片	A	暗灰色		No692・2083。未野産。大甕胴下部片
84	須恵壺				C片	B	黄灰色		No9・408。未野産。大甕胴部片
85	須恵壺				C片	A	暗灰色		No18。未野産
86	須恵壺				C片	B	淡灰色		No2105。未野産。外面外行タタキ・内面当具痕
87	土製支脚		(15.5)		A	B	明褐色	40%	No15-1379他
88	土罐	No1734。長さ4.3cm。最大径1.3cm。孔径0.3-0.4cm。重さ5.6g。胎土B C。焼成A。褐色。残存100%							
89	不明鉄製品	No933。残長3.0cm。棒状							

転ヘラケズリ。80も大型環と思われる。底部ヘラ切り後、外縁部と体部下端は回転ヘラケズリ。中心部にはヘラが届いていない。81は円面硯脚部で、長方形透しと未貫通の刻みがみえる。82は盤脚部か。83～86は甕。87は土製支脚である。

須恵器は312片出土した。環は140点・甕48点（いずれも未野産）、蓋は110点あり、未野産が109点、秋間産1点。壺・瓶類は11点あり、4点が未野産、湖西産が7点である。円面硯・高台杯・盤?は各1点あり、いずれも未野産である。時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

#### A区第13号住居跡（第37図）

第13号住居跡は48・49-11グリッドに位置する。第18号土壌がカマド上面に重複していた。平面形は方形で、規模は長軸長3.70m、短軸長3.35m、深さ0.32mである。主軸方位はN-100°-Eを指す。

床面は平坦で、カマド前面から住居中央付近を中心に堅く踏み固められていた。埋土は焼土・炭化物を多量に含む暗褐色から黒褐色土を基調とし、床面に炭化材が遺存していたことから、いわゆる焼失家屋と考えられる。

カマドは東壁に設置され、上面は第18号土壌の攪乱を受けている。袖の遺存状態は悪く、白色粘土が僅かに確認された程度である。燃焼部は壁を掘り込

み、底面は皿状に窪む。第5・6層下面が火床面に相当するものと推定される。

ピットは1本検出されたが、柱穴にはならない。貯蔵穴はカマド右脇に設けられていた（1号貯蔵穴）。楕円形で、規模は長径84cm、短径60cm、深さ54cm。カマド左脇にも土壌が1基検出されたが、上面に貼床が施されていた。規模は長径108cm、短径72cm、深さ20cmである。2号貯蔵穴としたが、掘り方の可能性もある。壁溝は検出されなかった。

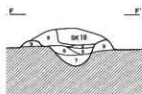
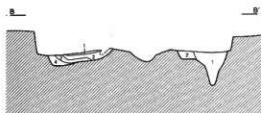
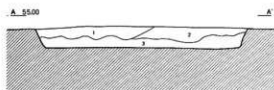
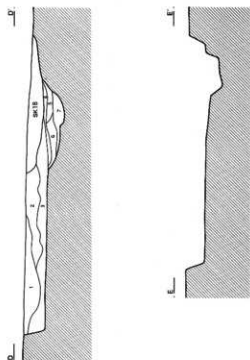
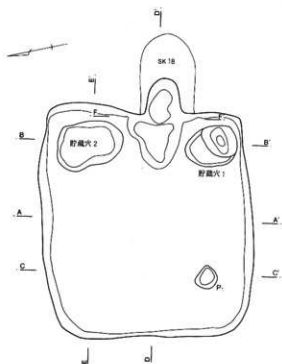
出土遺物は土師器環・甕・台付甕、須恵器環・蓋・高台付碗・鉢がある（第39図）。遺物は全体に浮いているものが多く、特にカマド左脇からは遺存率の高い土師器環、須恵器環がまとめて出土した。第38図1と5の土師器環、10の土師器環と12の須恵器環は2枚重なった状態で出土した。棚架施設など、壁外、または上部から転落した可能性があらう。

第39図1～10は土師器環。底部は平底または弱い丸底風で、9を除き、体部のヘラケズリ調整は施されない。11～15は須恵器環で、底部は回転系切り離し。11・14・15は未野産、13は南比企産である。12は全体に厚手で胎土は細かい。産地不明。群馬産の可能性があらう。16・17は未野産の高台碗と碗蓋。19はすり鉢と思われる。20～25はコの字状口縁甕である。口縁部の屈曲はあまり強くない。

第15表 A区第13号住居跡出土遺物観察表（第39図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	12.1	3.6		A B C D	A	褐色	85%	No101
2	土師環	12.0	3.8		B C	A	褐色	95%	No106
3	土師環	(12.3)	3.4		C D	A	褐色	55%	No77 No117床直 覆土。内面指押痕
4	土師環	12.0	3.7		B C E	A	褐色	85%	No241。指押痕明瞭

第37図 A区第13号住居跡



S J 13

- 1 暗褐色土 焼土粒子・微細なローム粒子少量
- 2 暗褐色土 焼土粒子多量。ロームブロック少量
- 3 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量  
ロームブロック少量
- 4 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子やや多量  
ローム粒子・白色粘質土
- 5 白色粘質土 最下層部焼土化
- 6 黒色土 炭化物粒子多量。焼土粒子少量
- 7 暗褐色土 白色粘質土・ロームブロック混入
- 8 暗褐色土 白色粘質土・ロームブロック混入
- 9 白色粘質土 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量

貯蔵穴 1

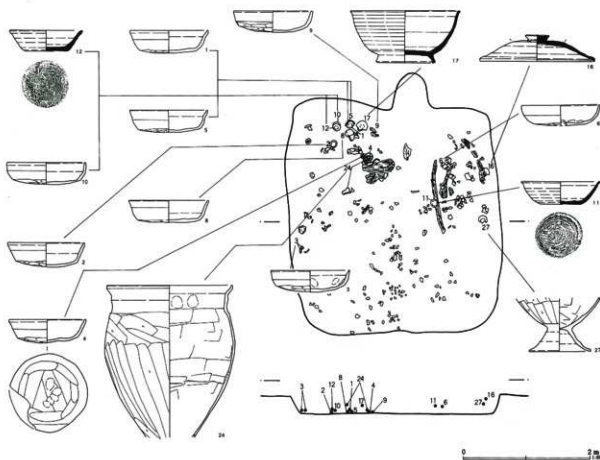
- 1 暗褐色土 焼土粒子やや多量。炭化物粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子・炭化物粒子・白色粘質土  
粒子少量

貯蔵穴 2

- 1 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量
  - 2 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子多量
  - 3 暗褐色土 ローム粒子多量
  - 4 黒褐色土 ローム粒子をブロック状に混入
- ビット 1
- 1 黒褐色土 ローム粒子少量
  - 2 黒褐色土 ロームブロック混入

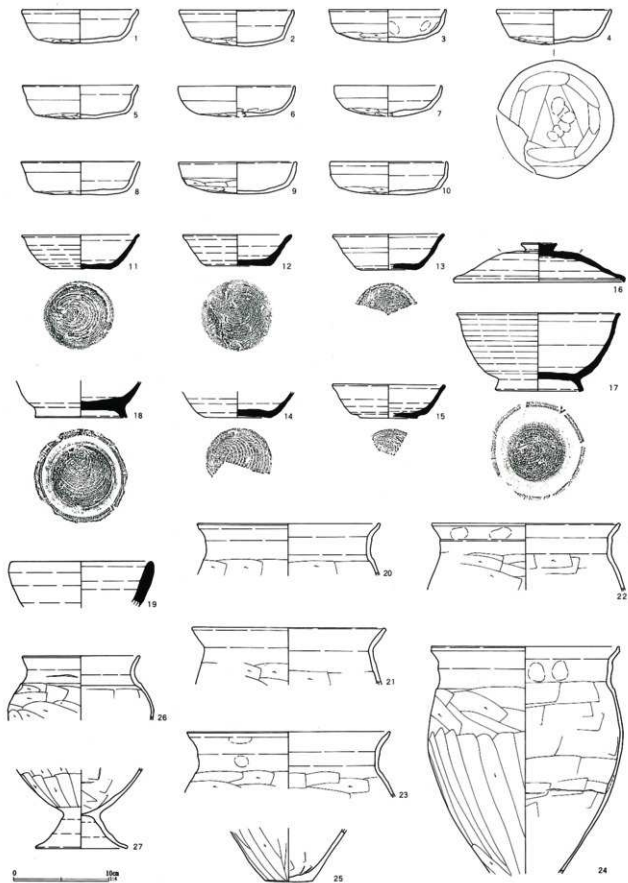


第38図 A区第13号住居跡遺物分布図



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
5	土師環	12.2	3.5		ABC	A	褐色	75% No102.	
6	土師環	(12.2)	3.2		ABC	A	淡褐色	30% No134. 内面指押圧痕	
7	土師環	(11.3)	3.2		ABC	B	褐色	35% 覆土	
8	土師環	12.5	3.5		ABC	A	褐色	100% No103	
9	土師環	12.3	3.4		ABC	A	暗褐色	95% No240 覆土。口縁部外面煤付着	
10	土師環	12.3	3.5		CD	A	褐色	90% No105. 口縁部煤付着	
11	須恵環	12.3	3.6	6.4	CE片	B	黄灰色	100% No131. 未野産。底部B 0手法	
12	須恵環	11.3	3.2	6.8	E	B	灰褐色	100% No104. 産地不明。底部B 0手法	
13	須恵環	(11.6)	3.7	(6.0)	E針	A	灰色	25% No38. 南比企産。底部B 0手法	
14	須恵環	2.7	7.0	9.6	E片	B	黄灰色	40% No49. 未野産。底部厚い。底部B 0手法	
15	須恵環	(11.8)	3.5	(6.0)	BE片	A	灰色	20% No82. 覆土。未野産。底部B 0手法	
16	須恵蓋	(17.8)	4.2		CE片	B	黄灰色	50% No132. 未野産。つまみ径3.8cm	
17	須恵高台碗	17.2	8.2	8.5	CE片	B	灰褐色	95% No236-239. 未野産。底部回転糸切り後高台貼り付け	
18	須恵高台碗		3.8	9.6	DE片	B	黄灰色	70% No116. 未野産。回転糸切り後高台貼り付け	
19	須恵すり鉢	(14.8)	4.8		CE片	A	灰色	15% 覆土。未野産	
20	土師甕	(19.2)	5.5		ABC	A	明褐色	20% No14-115	
21	土師甕	(20.2)	6.0		ACD	A	褐色	10% No5-164	
22	土師甕	(19.6)	7.1		BCD	A	褐色	15% 貯蔵穴	
23	土師甕	(21.4)	7.0		ABC	A	褐色	25% No25 覆土	
24	土師甕	(19.8)	24.0		BCEG	A	褐色	40% No84-111	
25	土師甕		5.6	5.1	BCD	A	褐色	45% No5-11他	
26	土師小型台付甕	(12.3)	6.7		ABC	A	褐色	25% No133-166 覆土	
27	土師小型台付甕		8.4	9.5	ACD	B	褐色	60% No35	

第39图 A区第13号住居跡出土遺物



須恵器は155片出土した。高台碗を含む坏・碗類が106点(末野99・南比企3・産地不明4)、蓋27点(末野24・南比企3)、甕11点(末野10・不明1)、壺・瓶類10点(末野7・不明3)、磨鉢1点(末野)である。坏口縁部の外反は弱く、底径もまだ大きい。また、大振りの高台碗と碗蓋を含み、皿は器種組成に加わっていない段階である。時期は熊野V期頃と考えられる。

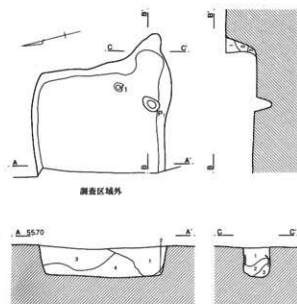
#### A区第14号住居跡 (第40図)

第14号住居跡は47-7グリッドに位置する。西壁部は調査区外に延び、全容は不明である。平面形は方形系で、残存規模は長軸長2.22m、短軸長1.56m、深さ0.50mである。主軸方位はN-105°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、堅く踏み固められていた。埋土の状態は、第1層を除くと、ロームブロックが霜降り状に含まれ、人為的に埋め戻された状況が観察された。

カマドは東壁の南端に設置される。埋土や壁面に被熱焼土がほとんどなく、カマドの存在に疑いをもったが、底面とその前面に灰・焼土が散布していたこと、埋土中に白色粘土が多く堆積していたことからカマドと認定した。袖は検出されず、底面の掘り込みもなく、床面と同一レベルで続く。ピットは1

第40図 A区第14号住居跡・出土遺物



本検出されたが、柱穴とは異なるであろう。

出土遺物は極めて少なく、須恵器坏1点と土師器坏小片が2点検出されたに留まる。第40図1はカマド前面の床面から出土した須恵器坏である。口径13.6cm、底径8.1cm、器高3.9cm。胎土に白色粒子・白色針状物質を含む。焼成は良好で、色調は淡青灰色。80%残存。註記№1。南比企産で、底部は回転糸切り後、周辺部回転ヘラケズリ調整が施されている。時期は熊野III期と考えておきたい。

#### A区第15号住居跡 (第41図)

第15号住居跡は48-10・11グリッドに位置する。第1・43号溝跡により、上面から床面にかけて大きく攪乱され遺存状態は悪い。平面形は長方形で、規模は長軸長3.30m、短軸長2.62m、深さ0.20mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

床面は概ね平坦であるが、西部を中心に削平されていた。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土・黒褐色土を基調としていたが、堆積状況は不明瞭である。

カマドは北東壁に設置される。上面を第43号溝跡に削平され遺存状態は良くない。燃焼部底面は床面よりも掘り下げられ、先端は壁を僅かに切り込んでいた。左袖部は溝跡によって大きく削平されていた。

#### SJ14

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック混入
- 4 暗褐色土 ロームブロック混入少量、黒色土混入

#### カマド

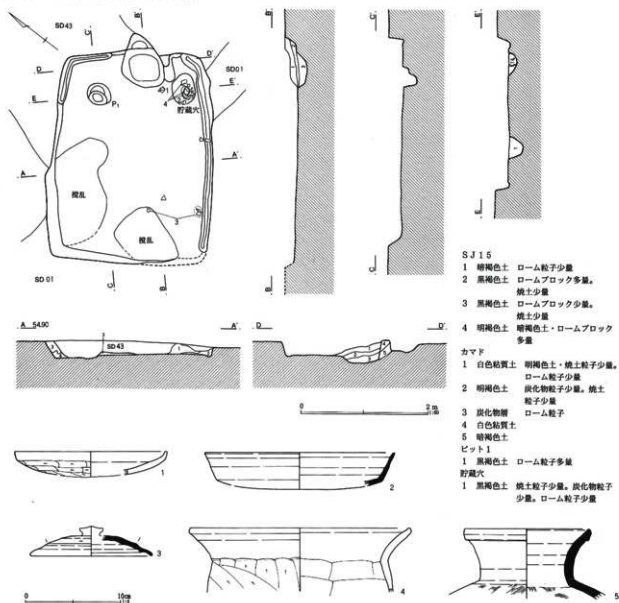
- 1 明褐色土 白灰色粘質土少量
- 2 暗褐色土 炭化物少量
- 3 暗褐色土 b層より炭化物少量

0 2m



0 10cm

第41図 A区第15号住居跡・出土遺物



第16表 A区第15号住居跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師皿	(16.0)	2.4		A B	B	褐色	20%	No2. 床面
2	須恵盤	(20.0)	3.4	17.6	C片	A	淡褐色	10%	No3. 貯蔵穴内。末野産。薄手で均質な作り
3	須恵蓋	12.7	2.1		C片	A	灰色	50%	No11-13. 床面。末野産
4	土師甕	23.0	6.7		A C	B	淡褐色	55%	No4. 貯蔵穴内
5	須恵短頸壺	13.0	7.3		B C片	A	暗灰色	80%	No5. 貯蔵穴内。末野産

右袖部は暗褐色土の上に白色粘土を積み上げていたが、遺存状態は良くない。

貯蔵穴はカマド右脇のコーナー部に設置されていた。平面形は楕円形で、規模は長径48cm、短径36cm、深さ13cmである。ピットは1本検出された。壁溝は

部分的に巡る。

出土遺物は少なく、土師器皿・甕・須恵器盤・蓋・壺がある(第41図1~5)。土師器皿(1)・須恵器蓋(3)は床面出土、須恵器盤(2)・壺(5)、土師器甕(4)は貯蔵穴内から出土した。須恵器盤(2)



の残存する底部にはヘラケズリ痕はみられない。末野産。3は口径11cm前後の小型環に対応する蓋で、内面にかえりが付く。4の土師器甕は胴部器壁が厚く、タテ及びナメ方向のヘラケズリが施されている。5の壺は胴部外面に平行タタキ、内面同心円当て具痕が残る。

須恵器は16片出土し、内訳は坏3点（末野2・南比企1）、盤1点（末野）、蓋4点（末野）、壺1点（末野）、甕7点（末野6・南比企1）である。時期は熊野I期新相～II期と考えられる。

#### A区第16号住居跡（第42図）

第16号住居跡は45-8グリッドに位置する。南壁から東壁にかけて調査できたが、大半は調査区外に延びている。重複遺構との新旧関係は、第17号住居跡、第5号掘立柱建物跡を切り、第11号溝跡に切られていた。平面形は方形系と推定されるが、若干歪みがある。残存規模は長軸長2.42m、短軸長1.50m、深さ0.28mである。主軸方位は南壁を基準にするとN-100°-Eを指す。

床面は平坦で堅く踏み固められていた。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土で構成され、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマド・ピットなどの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器・須恵器細片が覆土中から検出されたが、遺構に確実に伴うものはない。

時期は重複遺構との関係から9世紀後半またはそれ以降と考えられ、中世の竅穴状遺構となる可能性もある。

#### A区第17号住居跡（第42図）

第17号住居跡は調査区南西部の45・46-8グリッドに位置する。重複する第28号住居跡を切り、第16・18号住居跡、第5号掘立柱建物跡、第11号溝跡に切られており、正確な規模は不明である。平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸長5.58m、短軸長5.16m、深さ0.49mである。主軸方位はN-9°-Eを指す。

床面は北東隅がやや軟弱だった他は、全体に堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックが多量に含まれる層（第3層）を含み、南東側から埋め戻された様相がうかがえる。

カマドは北壁に設けられていた。燃焼部の大半は第11号溝跡に破壊され、燃焼部と煙道部先端が僅かに残存するのみである。側壁上部は被熱し、埋土には焼土が多量に含まれていた。

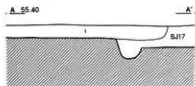
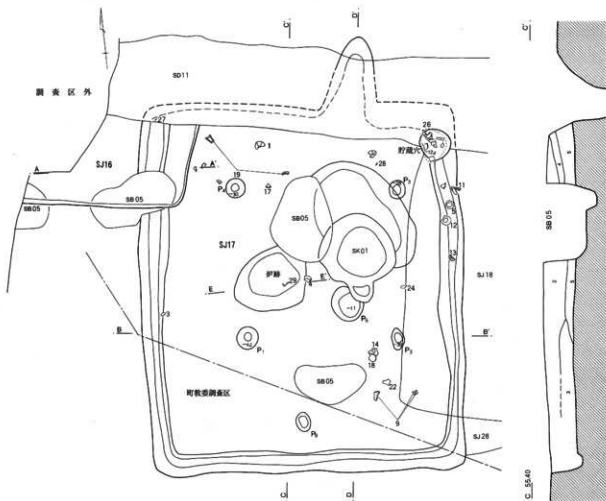
貯蔵穴は不明確であるが、北東コーナー付近に遺物を含む掘り込みがあり、あるいは貯蔵穴の一部かとも思われた。但し、壁溝と重なり、溝跡によって北半は破壊されているため確証は得られなかった。

ピットは6本検出された。Pit1-4は主柱穴である。住居中央部の床面には浅い炉跡状の焼土層が堆積していた。上面に灰層が被り、その下面は赤く被熱していた。鉄滓等の遺物もなく性格は不明。北端部は第5号掘立柱建物跡によって切られていた。また、カマド前面の床面には土塊が掘り込まれていた（SK1）。上面に灰層と硬化した床面が形成されていたことから、床下土塊と考えられる。底面には黒色炭化物層が形成されていた（第16層）。壁溝は全周する。深さ5-10cm。

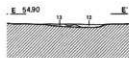
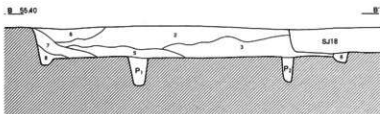
出土遺物は土師器環・暗文環・甕・壺、須恵器環・碗・蓋・高台付皿・壺・甕と鉄製品がある（第43・44図）。

第43図1-4は土師器環。口縁部は内彎気味に納め、底部はやや丸底風である。5は平底暗文環で、内面放射十螺旋暗文。底部と体部下位がヘラケズリされる。東壁際から12の須恵器環と並んだ状態で出土した。6-8は蓋。9は南比企産の須恵器無台碗である。10-17は須恵器環である。10は口径の大きい扁平な環で、南比企産。12・13は口径13.5cmほどの末野産の環。底部は回転糸切り後無調整である。14の環は18の高台付皿と共に遺構確認面から出土したもので、本住居に伴うものではなからう。19はコップ形土器で、南比企産。底部と体部下端がヘラケ

第42図 A区第16・17号住居跡



SJ16  
1 暗褐色土 ロームブロック混在

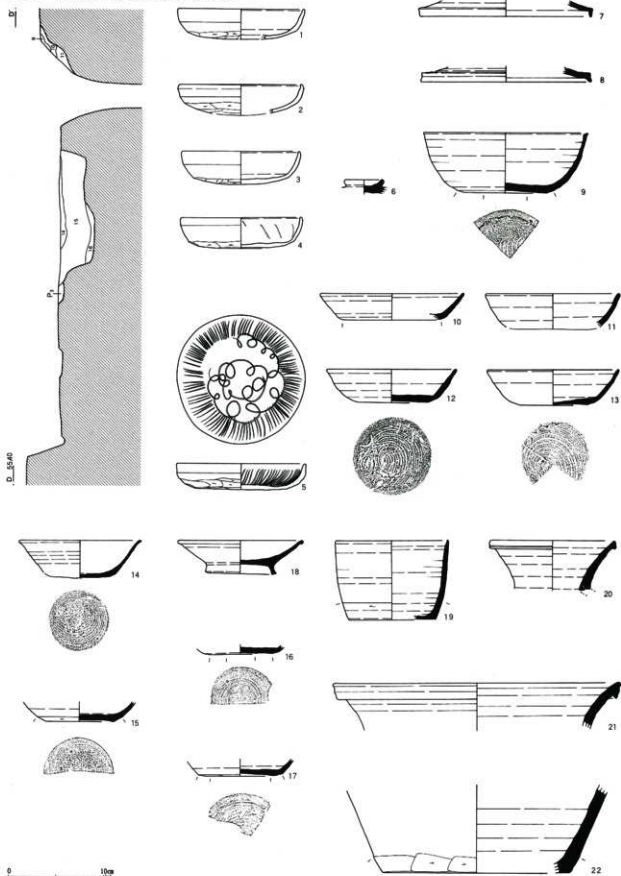


SJ17

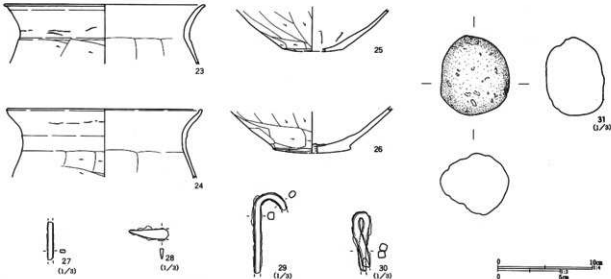
- |        |                               |                    |              |
|--------|-------------------------------|--------------------|--------------|
| 2 褐色土  | 小ロームブロック・焼土粒子多量<br>炭化物・粘土粒子少量 | 9 暗褐色土             | 焼土ブロック混入     |
| 3 明褐色土 | 灰白色粘土ブロック・ロームブロック<br>焼土粒子多量   | 10 灰白色土            | 粘質土・焼土ブロック多量 |
| 4 暗褐色土 | 炭化物粒子・ローム粒子少量                 | 11 灰白色土            | 焼土微量         |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子霈降状に混入           | 12 灰層              | 焼土・炭化物混入     |
| 6 黒褐色土 | ロームブロック多量                     | 13 粘土              |              |
| 7 褐色土  | ローム粒子・焼土粒子少量                  | 14 明灰褐色土           | 粘土・焼土・ローム含む  |
| 8 明褐色土 | ローム粒子少量                       | 15 褐色土とロームブロックの混土層 |              |
|        |                               | 16 黒色炭化物層          |              |

0 2m

第43图 A区第16·17号住居跡出土遺物(1)



第44図 A区第16・17号住居跡出土遺物(2)



第17表 A区第17号住居跡出土遺物観察表(第43・44図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	13.2	3.2		A D	B	褐色	70%	No28, 覆土下層
2	土師環	(12.8)	3.0		A B	B	褐色	25%	覆土
3	土師環	(12.4)	3.4	(10.0)	A B	B	褐色	35%	No35
4	土師環	(12.5)	3.2	(11.2)	A	A	褐色	40%	No23, 覆土下層
5	土師暗文環	13.6	2.7		A B D	A	明褐色	95%	No17, 壁溝上。内面放射十光暗文
6	須恵壺		1.5		C F片	B	黄褐色	50%	覆土。未野産。蓋つまみ
7	須恵壺	(18.0)	1.6		B針	A	灰色	5%	覆土。南比企産
8	須恵壺	(17.9)	1.6		C片	A	青灰色	5%	覆土。未野産
9	須恵碗	(17.2)	6.3	(8.6)	B針	A	灰色	20%	No4・8, 覆土下層。南比企産。底部B3d手法
10	須恵環	(15.0)	2.8	(10.4)	B C針	A	灰色	15%	覆土。南比企産。底部回転ヘラケズリ
11	須恵環	(14.0)	3.5		C片	A	灰色	25%	No20, 覆土。未野産
12	須恵環	13.5	3.5	7.1	C片	A	灰色	95%	No16, 壁溝上。未野産。底部B0手法
13	須恵環	(13.8)	3.7	7.2	C F片	B	灰色	50%	No14 SK01内。未野産。底部B0手法
14	須恵環	(12.6)	4.0	6.2	C F	A	淡褐色	65%	No11, 確認面。未野産。底部B0手法。黒色粒子多量
15	須恵環		2.1	7.2	C F片	A	灰色	50%	覆土。未野産。底部B3d手法
16	須恵環		0.8	6.5	C針	A	灰色	50%	覆土。南比企産。底部B3d手法
17	須恵環		1.7	(8.8)	C片	A	灰色	25%	No27, 覆土上層。未野産。底部B3d手法
18	須恵高台皿	13.0	3.6	6.6	C片	B	淡褐色	80%	No10, 確認面。未野産
19	須恵コップ形	(11.8)	8.3	9.2	B針	A	紫灰色	25%	No26・32, 覆土下層。南比企産。
20	須恵壺	(13.0)	5.2		B C	A	青灰色	10%	覆土。未野産
21	須恵甕	(30.0)	4.9		C片	A	黒灰色	5%	覆土。未野産
22	須恵甕		9.3	(19.6)	C片	B	灰白色	10%	No7, 覆土下層。未野産
23	土師甕	(21.0)	6.3		A B D	A	褐色	15%	覆土
24	土師甕	(20.5)	7.2		A	A	褐色	15%	No12, 床面
25	土師甕		4.5	6.4	A B	B	暗褐色	80%	覆土
26	土師甕		4.9	8.2	A B	B	褐色	70%	貯蔵穴内+No36, 底部突出
27	不明鉄製品	No34, 床面。残長3.0cm。棒状							
28	刀子?	No21, 床面。残長3.1cm。切先部。鉄製							
29	不明鉄製品	No24, 残長6.3cm。棒状屈曲							
30	不明鉄製品	残長4.6cm。棒状交差							
31	軽石	SJ16 No783 長径6.2cm, 短径5.4cm, 厚さ4.6cm, 重さ95g							

ズリされる。23・24は土師器甕。器壁は薄く、胴部 須恵器は166片出土し、環91点(未野69・南比企16・はヨコ・ナナメ方向補ヘラケズリが施される。不明6)、碗1点(南比企)、高台碗3点(未野)、蓋

13点(末野10・南比企3)、甕52点(末野51・不明1)、壺・瓶類4点(末野3・不明1)、盤1点(末野)、コップ形土器1点(南比企)がある。末野産須恵器の比率が圧倒的に高い。

時期は熊野Ⅲ期と考えられる。

#### A区第20号住居跡(第45図)

第20号住居跡は45-8グリッドに位置する。東壁部の周辺が調査されたのみで、大半は調査区外に延びている。北側には第51号土壌が重複するが、新旧関係は不明確である。平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長3.30m、短軸長1.08m、深さ0.60mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

床面はやや起伏をもち、堅く締まっていた。

埋土は下層にカマドから流出した白色粘土が堆積していた(第4層)。

カマドは東壁に2基検出された。第1号カマドは南側にあり、燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。掘り込みは深く、第6・7層が灰層に相当するものと考えられる。袖はほとんど流出したと思われる、断面観察によっても明確に把握することはできなかった。第2号カマドは北側にあり、煙道部が検出されたのみである。掘り込みも浅く床面まで達していない。遺存状態から第2号→第1号カマドに

付け替えられたものと考えられる。

貯蔵穴はカマド脇の南東コーナー部に掘り込まれている。床面からの深さ18cm。ビット・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器杯・甕・台付甕、須恵器杯・蓋・高台椀・壺・高盤、鉄製品、不明土製品がある(第45図)。1・2は扁平、平底風の土師器杯。4~6は須恵器杯。いずれも底径は口径の1/2を上回っている。5はやや大振りである。9は高盤脚部。2条の線刻で加飾されるが、貫通していない。2単位または4単位の施文であろう。11~13は土師器甕。いわゆる「コ」の字状口縁甕であるが、11・12は口縁部の屈曲が弱く、13は典型的な形態になっている。14は円柱状の土製品で、用途不明。15は関筥被片刃箭鏃、16は刀子片である。

須恵器は53片出土し、坏36点、高台椀3点、蓋2点、高盤1点、甕10点、壺・瓶類1点がある。すべて末野産と考えられる。時期は熊野V期に比定される。

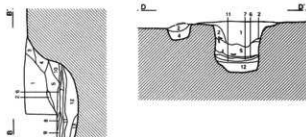
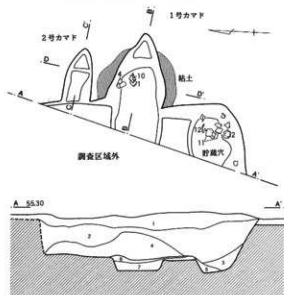
#### A区第22号住居跡(第46図)

第22号住居跡は45-8グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第23・24号住居跡を切り、第21号住居跡に切られていた。平面形は方形で、規模

第18表 A区第20号住居跡出土遺物観察表(第45図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師杯	12.4	3.0	10.4	ABD	C	黄褐色	65%	カマド+No.4. 粉っぽい素地土。口縁部に爪先状の凹み
2	土師杯	12.3	3.5	9.7	AB	B	褐色	90%	No.13. 貯穴上部
3	須恵壺	(19.0)	1.4		片	B	淡灰色	10%	覆土。末野産
4	須恵杯	(12.0)	3.4	(6.6)	C片	B	灰白色	60%	No.18. カマド内 末野産 底部B0手法
5	須恵杯	(13.4)	3.9	(7.6)	C片	C	黄灰色	20%	No.20 覆土 末野産 底部B0手法
6	須恵杯	(11.6)	3.3	(6.4)	C片	B	灰色	35%	覆土。末野産 底部B0手法
7	須恵高台椀		3.2	7.6	C片	A	暗青灰色	80%	覆土。末野産
8	須恵壺	(12.0)	4.2		BC片	A	青灰色	20%	覆土。末野産
9	須恵高盤		5.9		CD	C	暗灰色	40%	覆土。末野産。高盤脚部。2条1単位の線刻。
10	土師小型台付甕		3.7	7.7	AB	A	橙褐色	70%	No.16 カマド内
11	土師甕	(20.2)	14.3		AB	A	褐色	30%	No.6-11 貯穴上部
12	土師甕	(19.8)	5.0		AE	A	明褐色	30%	No.8 貯穴上部
13	土師甕	(19.4)	7.7		AC	A	橙褐色	45%	覆土
14	不明土製品	カマド。残長3.1cm。直径1.4cm。重量5.25g。円柱状(中実)をなす。両端欠失。淡褐色							
15	鉄鏃	残長9.0cm。片刃箭。関筥被 覆土							
16	刀子	カマド。残長6.4cm。茎部							

第45図 A区第20号住居跡・出土遺物



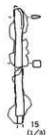
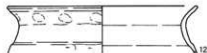
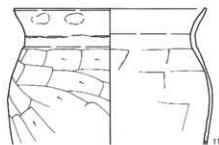
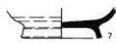
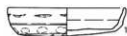
- 1号カマド
- |           |                    |
|-----------|--------------------|
| 1 灰白色粘質土  |                    |
| 2 焼土層     |                    |
| 3 白色粘質土   | ローム粒子少量            |
| 4 暗灰褐色粘質土 | 焼土粒子多量             |
| 5 暗褐色土    | 焼土粒子・炭化物粒子少量       |
| 6 灰層      | 灰多量                |
| 7 焼土層     | 炭化物粒子・焼土粒子多量       |
| 8 暗茶褐色土   | 炭化物粒子・焼土粒子・白色粘質土多量 |
| 9 黒褐色土    | 焼土粒子・炭化物粒子多量       |
| 10 黒褐色土   | 炭化物粒子・焼土粒子少量       |
| 11 黒色土    | 灰を主体にカーボン粒子・焼土粒子混入 |
| 12 灰白色粘土  | ロームブロック・焼土ブロック混入   |
| 13 褐色土    | 焼土粒子・焼土ブロック多量      |

SJ20

- |          |                        |
|----------|------------------------|
| 1 明灰褐色土  | 暗褐色土混入。焼土粒子・白色粘土ブロック少量 |
| 2 明灰褐色土  | ロームブロック・ローム粒子少量        |
| 3 暗灰褐色土  | ロームブロック多量              |
| 4 灰白色粘質土 | 焼土粒子少量                 |
| 5 黒色土    | カーボン粒子・焼土粒子混入          |
| 6 灰白色粘土  |                        |
| 7 褐色土    | 焼土粒子多量                 |

- 2号カマド
- |        |                     |
|--------|---------------------|
| 1 黄灰色土 | 焼土粒子混入              |
| 2 焼七   | 黄灰色粘土混入             |
| 3 明褐色土 | 焼土ブロック・焼土粒子・黄灰色粘土混入 |
| 4 黄褐色土 | ローム粒子主体。褐色土混入       |

0 2m



0 5cm 10cm

は長軸長3.65m、短軸長3.42m、深さ0.07mである。主軸方位はN-105° - Eを指す。

床面は第24号住居跡の覆土中に形成され、概ね平坦であるが、硬化面は認められなかった。南壁部を中心とした部分は第21号住居跡に削平されていた。

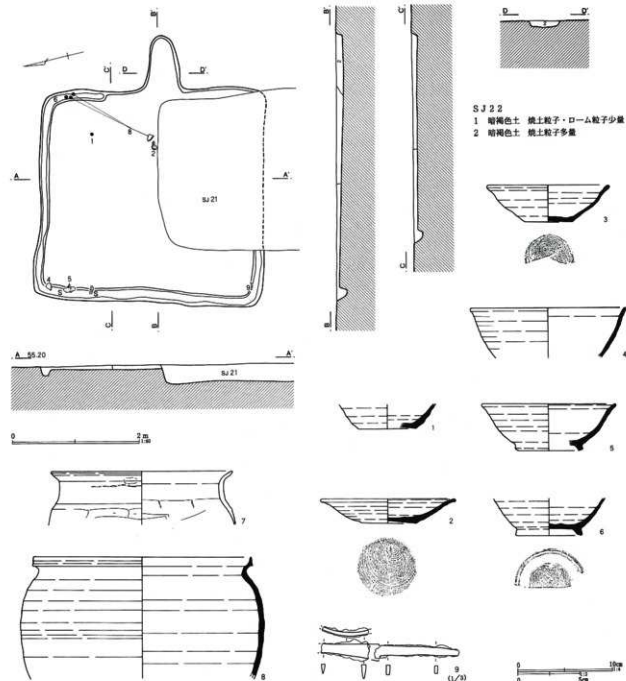
埋土は焼土混じりの暗褐色土を基調としており、覆土が浅いために堆積状況は不明確である。

第46図 A区第22号住居跡・出土遺物

カマドは東壁のほぼ中央に設置されていた。燃焼部は壁を切り込んでおり、底面の掘り込みは浅い。埋土には焼土粒子が多量に含まれているが、被熱層、灰層は検出されなかった。

ビットは検出されなかった。壁溝はカマドの周辺を除いて巡る。

出土遺物は少ない。須恵器坏・皿・高台碗・鉢、



第19表 A区第22号住居跡出土遺物観察表 (第46図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器		2.6	(6.0)	B	A	明灰色	20%	No.9. 覆土。素地土緻密。産地不明。底部B0手法
2	須恵器	14.0	2.6	5.9	D片	B	褐色	70%	No.17. 覆土。末野産
3	須恵器	(12.6)	3.8	5.0	B	A	灰色	35%	覆土。素地土緻密で薄手。産地不明。底部B0手法
4	須恵高台碗	(16.2)	5.3		C片	B	灰色	20%	No.12. 覆土。末野産
5	須恵高台碗	(14.0)	4.9	(6.4)	C片	D	灰褐色	20%	No.13. 覆土。末野産
6	須恵高台碗		4.0	6.8	C片	B	淡灰色	35%	SJ23 No.5. 末野産
7	土師甕	(19.0)	5.6		AB	A	褐色	10%	カマド
8	須恵鉢	(23.0)	12.8		BC	A	灰色	15%	No.5-6他。覆土。産地不明。素地土比較的緻密
9	刀子								No.15 床直。残長10.4cm。2片接合しないが同一個体であろう 位置は推定 刃部分は若干湾曲する

土師器甕、刀子が検出された(第46図)。第46図9の刀子以外は床面よりも浮いた状態で出土した。1・3は須恵器環。末野産かとも思われるが、胎土が比較的緻密。底部は回転糸切り後無調整。2は須恵器皿。4～6は高台碗。4は大振りである。7は土師器甕で、口縁部は「コ」の字状に屈曲する。8は須恵器鉢。比較的薄手の造りである。

須恵器は42片出土し、器種別出土数は坏26点(末野産23・南比企産1・産地不明2)、高台碗3点(末野)、蓋4点(末野)、鉢4点(不明)、甕5点(末野)となる。時期は熊野Ⅵ期と考えられる。

#### A区第23号住居跡(第47図)

第23号住居跡は調査区南西部の45-8・9グリッドに位置する。第24号住居跡の内側に重なっている。重複遺構との新旧関係は、第24号住居跡を切り、第21・22号住居跡、第38号掘立柱建物跡、第34号土壌に切られていた。平面形は方形で、規模は長軸長3.72m、短軸長3.42m、深さ0.17mである。主軸方位はN-0°を指す。

床面はやや凹凸をもつが、バリバリに踏み固められていた。埋土は、ロームブロック混じりの暗褐色土を基調としており、大きな土層変化は観察されなかった。

カマドは北壁に設置される。燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれ、底面は揺鉢状に窪む。袖はロームブロックと白色粘土混じりの褐色土で構築されるが、かなり流出した状況であった。ピットは検出されなかった。壁溝は全周する。深さ5cm程度。

出土遺物は少なく、土師器暗文環・台付甕、須恵器環、砥石が検出された(第47図)。1は平底暗文環。2は南比企産の須恵器環。3は末野産の須恵器環。カマド内から出土した。底部は回転糸切り後、手持ちで周辺を削っている。5は小型台付甕、6は砥石である。須恵器は45片出土し、内訳は坏が34点、高台碗が1点、甕が4点、鉢が1点、蓋が5点となる。産地別の総計は、末野産28点、南比企産7点、不明10点となる。時期は熊野Ⅲ期新相-Ⅳ期と考えられる。

#### A区第24号住居跡(第48図)

第24号住居跡は調査区南西部の45-8・9グリッドに位置する。第21-23号住居跡、第38号掘立柱建物跡、第34・41号土壌と重複し、本住居跡が最も古い。平面形は整った方形で、規模は長軸長5.85m、短軸長5.80m、深さ0.17mである。主軸方位はN-17°-Wを指す。

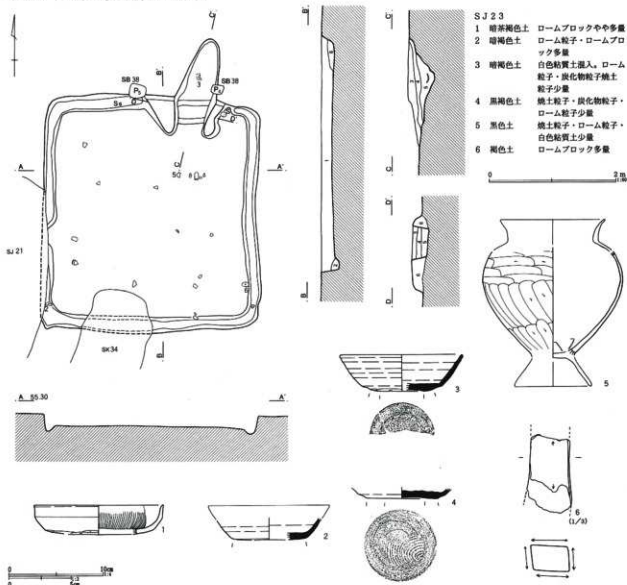
残存する床面は、平坦で堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックを多く含む褐色系土が基調となり、埋め戻された可能性もある。

カマドは北壁に設置され、燃焼部は壁を僅かに切り込んでいた。袖の遺存状態は良くないが、ローム混じりの褐色土の上に白色粘土を積み上げて構築されていた。第2-4層が天井部崩落土、第5層が灰層と考えられる。

貯蔵穴はカマド脇の北東コーナーに掘り込まれている。楕円形プランで、規模は長径102cm、短径90cm、深さ50cmである。



第47図 A区第23号住居跡・出土遺物



- SJ23
- 1 暗茶褐色土 ロームブロックや多量
  - 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
  - 3 暗褐色土 白色粘質土混入、ローム粒子・炭化物粒子焼土粒子少量
  - 4 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量
  - 5 黒色土 焼土粒子・ローム粒子・白色粘質土少量
  - 6 褐色土 ロームブロック多量

第20表 A区第23号住居跡出土遺物観察表 (第47図)

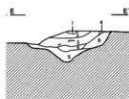
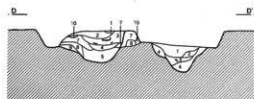
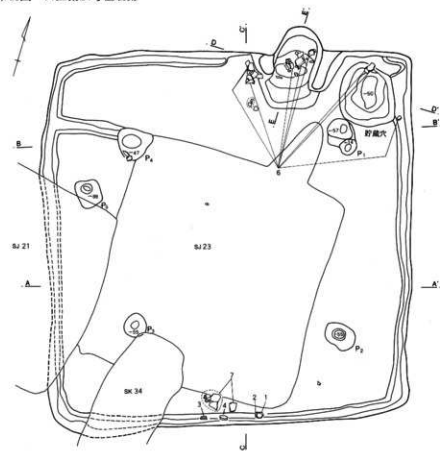
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師暗文環	(13.6)	3.0	(11.4)	AB	B	褐色	15%	覆土。内面放射暗文
2	須恵環		2.2	(7.6)	針	A	灰色	25%	No.6。覆土。南北企産。底部回転ヘラクズリ
3	須恵環	(12.8)	3.8	(6.7)	BCD片	A	暗灰色	50%	カマド。未野産。底部B2手法
4	須恵環		1.0	7.4	CD片	C	褐色	95%	カマド袖。未野産。底部B2手法
5	土師台付甕		11.3		AB	A	褐色	35%	No.10。覆土
6	砥石	残長6.2cm。重量75.9g。凝灰岩製。覆土。上下両端欠失。四面とも使用され平滑							

ピットは5本検出された。Pit 1～4が主柱穴である。深さ47～57cm。壁溝はほぼ全周する。深さ5～10cm。また、西壁からPit 4に向かって溝が延びていた。間仕切り溝の可能性もあろう。

出土遺物は土師器環・暗文環・甕がある(第49図)。1～5は土師器環である。1・2は内屈口縁の北武蔵

型環で、南壁際から2枚重なった状態で出土した(1が上、2が下)。3は有段口縁環、4は暗文環でいずれも南壁際からまよって出土した。5は4と同タイプの暗文環で、貯蔵穴内出土。6・7は土師器甕。6はカマドとその周囲から散乱した状態で出土した。7は1～4の土師器環と共に南壁付近から出土した。

第48図 A区第24号住居跡

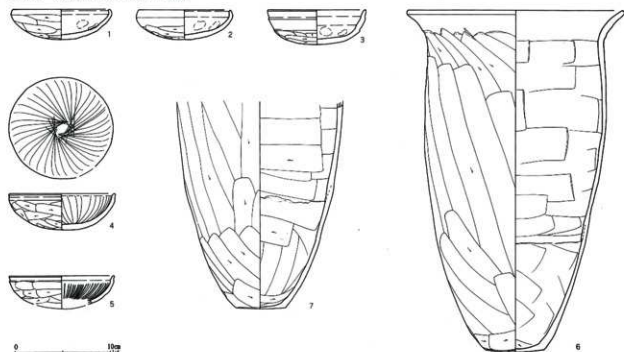


S J 2 4

- |         |                              |
|---------|------------------------------|
| 1 暗茶褐色土 | ロームブロック・ローム粒子多量<br>炭化物粒子少量   |
| 2 黒褐色土  | ローム粒子少量                      |
| 3 暗褐色土  | ロームブロック多量                    |
| 4 明褐色土  | ロームブロック混入<br>カマド             |
| 1 黒褐色土  | 炭化物粒子混入                      |
| 2 褐色土   | ローム粒子・粘土粒子少量                 |
| 3 明褐色土  | 灰白色粘土ブロック多量。<br>ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 4 赤褐色土  | 焼土                           |
| 5 黒灰色土  | 灰・炭化物主体。<br>ロームブロック少量        |
| 6 褐色土   | 焼土粒子・ローム粒子少量                 |
| 7 白色粘土  | ロームブロック少量                    |
| 8 褐色土   | ローム粒子・ロームブロック少量              |
| 9 明褐色土  | ロームブロック・ローム粒子多量              |
| 10 褐色土  | ロームブロック少量                    |
| 野蔵穴     |                              |
| 1 暗褐色土  | ロームブロック少量                    |
| 2 黒褐色土  | ロームブロック少量                    |
| 3 明褐色土  | ロームブロック・ローム粒子多量              |
| 4 黄褐色土  | ローム主体。褐色土混入                  |

0 2m

第49図 A区第24号住居跡出土遺物



第21表 A区第24号住居跡出土遺物観察表 (第49図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	10.2	3.2		AC	A	褐色	95%	No.23. 内面指押圧痕
2	土師環	9.7	3.2		ABC	A	褐色	100%	No.24. 内面指押圧痕
3	土師環	10.3	3.7		ABCD	A	明褐色	100%	No.28. 内面指押圧痕
4	土師暗文環	11.1	3.9		BCDE	A	明褐色	100%	No.27. 内面放射暗文
5	土師暗文環	(11.0)	3.0		ABCD	A	褐色	30%	貯蔵穴. 内面放射暗文
6	土師甕	20.6	36.0	6.3	ABCD	A	褐色	75%	No.19-20他.
7	土師甕		21.8	5.3	ABCD	A	淡褐色	60%	No.25-26.

須恵器は13片出土しているが、いずれも細片で実測可能なものはない。また、混入遺物が大半である。

時期は熊野Ⅰ期と考えられる。

#### A区第28号住居跡 (第50図)

第28号住居跡は45・46-8・9グリッドに位置する。第17・18号住居跡及び第11号溝跡によって遺構の大半は削平され、遺存状態は極めて悪い。平面形はやや歪んだ方形と推定され、規模は長軸長6.66m、短軸長5.45m (推定)、深さ0.35mである。主軸方位はN-5°-Eを指す。第17号住居跡に軸を揃えて重複することから、本住居跡から17号住居跡に建て替えられた可能性がある。

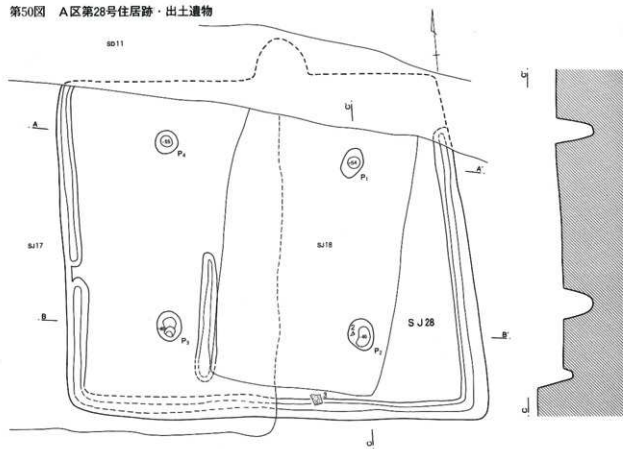
床面は第17・18号住居跡に削平されており、遺存状態は悪いが、残存する床面は平坦で堅く締まっていた。埋土の状態も不明確であるが、ローム混じり

の褐色土を基調としており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは検出されなかった。第11号溝跡によって破壊されたものと思われる。ピットは4本検出された。主柱穴に対応するものと思われる。深さは46~55cm。壁溝は一部不明確な部分もあるが、西壁部も第17号住居跡床面下から確認された。深さは10~15cm。

出土遺物は少なく、土師器環、須恵器環、須恵器甕が検出されたに留まる (第50図)。1は土師器環。内屈口縁の北武蔵型環。2は須恵器環。底部と体部下端は回転ヘラケズリ。3は須恵器甕胴部片。外面擬斜格子タタキ、内面同心円文当て具。時期は不明確であるが、熊野Ⅱ期~Ⅲ期前半と考えておきたい。

第50図 A区第28号住居跡・出土遺物

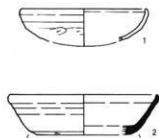


A\_5630

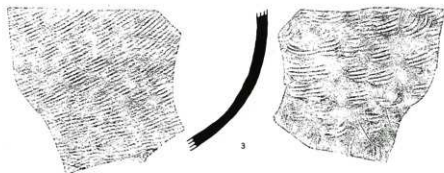


- ビット
- 1 黒灰褐色土 炭化物・ローム粒子少量
  - 2 明褐色土 ロームブロック多量
  - 3 褐色土 ロームブロック嵩降状に混入

0 2m



0 10cm



第22表 A区第28号住居跡出土遺物観察表 (第50図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(13.0)	3.4		A B	A	褐色	20%	覆土。
2	須恵環	(15.5)	4.2	(10.0)	D片	B	黒灰色	15%	Pit2 No.1, 末野産。底部+体部下端回転ヘラズリ
3	須恵甕				C片	A	明灰色		No.1, 末野産。斜格子状叩き+同心円状当具

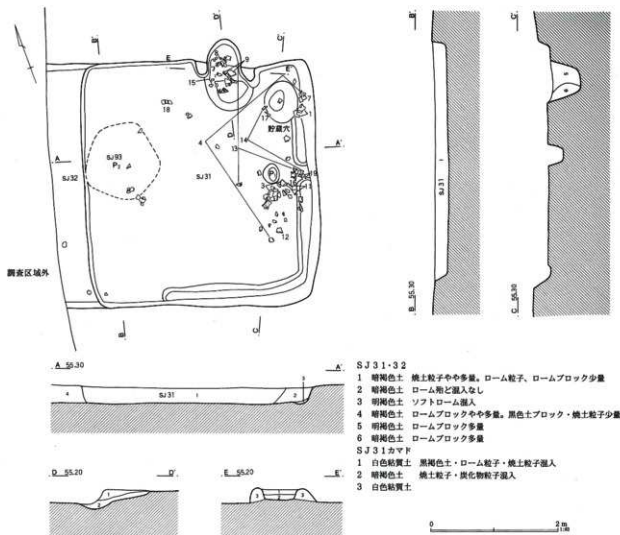
A区第31・32号住居跡 (第51図)

第31・32号住居跡は44・45-8グリッドに位置する。遺構確認段階で、第31号住居跡西壁ラインが認識されたため、第32号住居跡から第31号住居跡に建て替えられたと理解したが、床面及び南北の壁は変化なく続くことが判明した。本来同一住居であった可能性もある。また、第93-95号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。第33号掘立柱建物跡との関係は不明確であるが、壁ラインの遺存状態から見て本住居跡の方が新しい可能性が高い。

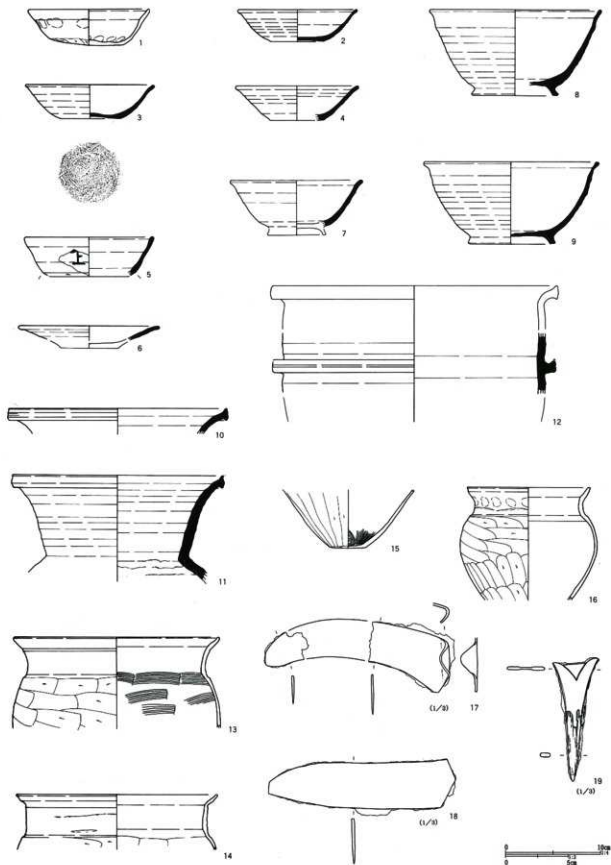
第31号住居跡は平面形は方形で、規模は長軸長3.90m、短軸長3.72m、深さ0.18mである。第32号住居跡は西壁部が調査区外に延び、横長の長方形となるものと推定される。東西長が4.20m以上となる他は、第31号住居跡と同一規模と考えられる。主軸方位はN-18°-Eを指す。

床面は平坦でカマド前面と住居中央部付近が強く踏み固められていた。埋土は焼土粒子混じりの暗褐色

第51図 A区第31・32号住居跡



第52图 A区第31·32号住居跡出土遺物



第23表 A区第31・32号住居跡出土遺物観察表 (第52図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	12.6	3.8	7.8	AD	B	褐色	60%	SJ31-32No59-60, 覆土
2	須恵環	(12.4)	3.3	5.5	C片	A	青灰色	40%	SJ31-32No36, 覆土。未野産。底部B0手法
3	須恵環	13.3	3.6	6.2	C D片	C	茶褐色	90%	No47-69, 覆土下層。未野産。底部B0手法
4	須恵環	(12.6)	3.6	(5.8)	C片	A	青灰色	40%	No20-58他, 未野産。底部B0手法
5	須恵環	(13.4)	4.0		B C	B	灰白色	10%	カマド。産地不明(群馬産か?) 体部に墨書「口上」
6	須恵皿	(14.6)	1.5		片	D	灰黒色	20%	SJ31 覆土。未野産
7	須恵高台椀	(13.6)	5.0		B	A	暗灰色	45%	SJ31-32No56-57, 覆土。産地不明。微細砂粒多く含む
8	須恵高台椀	(17.8)	8.9	(8.9)	C片	C	淡灰色	35%	SJ31カマドNo2, 未野産
9	須恵高台椀	18.1	8.6	8.2	C片	A	灰色	95%	SJ31カマドNo8, 11他, 未野産
10	須恵甕	(23.0)	2.7		C片	A	灰色	5%	覆土。未野産
11	須恵甕	22.2	11.3		C片	A	青灰色	65%	SJ31-32No31-34他, 覆土。未野産
12	須恵甕		6.4		片	A	淡青灰色	10%	No21, 覆土。未野産。突等先端欠失
13	土師甕	(21.6)	9.5		AB	A	明褐色	20%	SJ31カマドNo3, SJ31-32No45-52, 覆土
14	土師甕	(21.0)	5.8		AB	A	明褐色	20%	SJ31-32No42-63, 覆土下層
15	土師甕		6.1	4.0	ABE	A	褐色	50%	SJ31カマドNo7-18
16	土師小型台付甕	12.8	11.8		AB	A	褐色	60%	SJ31-32No44-46他, 床+覆土下層
17	鎌	No40-41, 覆土。残長9.3cm, 幅3.8cm, No40先端部							No41柄装着部
18	不明鉄製品	No73, 覆土。残長14.7cm, 幅3.7cm,							
19	不明鉄製品	No65, 覆土。残長9.7cm,							

色土を基調としており、大きな土層変化は見られなかった。

カマドは北壁に設置される。焼成部は壁を切り込んで掘り込まれていた。袖は白色粘土を積み上げているが遺存状態はあまり良くない。第1層は天井部崩落土、第2層が灰層に相当する。

ビットは1本検出されたが、住居に伴うものではなかろう。壁溝は東壁から南壁にかけて検出されたが、西壁部分には認められなかった。

第31・32号住居跡から出土した遺物は、土師器環・甕・小型台付甕、須恵器環・高台椀・皿・甕・瓶と鉄製品がある(第52図)。1は土師器環。平底でやや深身である。2-4は須恵器環。底径は口径の1/2以下に縮小している。5は混入資料と思われる、体部に「口上」の墨書がある。6は須恵器皿。7-9は須恵器高台椀で大小2種がある。10-11は須恵器甕、12は須恵器瓶である。13-16は「コ」の字状口縁甕。16は小形台付甕である。17は鉄鎌、18は不明鉄製品。鎌に似るが、刃部の屈曲がない。小刀状となる。19も不明鉄製品。雁股鎌に似るが、刃部が連結している。木質が遺存することから柄に差し込んで使用されたものと思われる。

須恵器は130片出土した。内訳は環が77点(末野71・南比企5・不明1)、高台椀7点(末野5・不明2)、皿10点(末野9・不明1)、蓋7点(末野)、甕28点(末野)、瓶1点(末野)となる。時期は熊野VI期と考えられる。

#### A区第34号住居跡 (第53図)

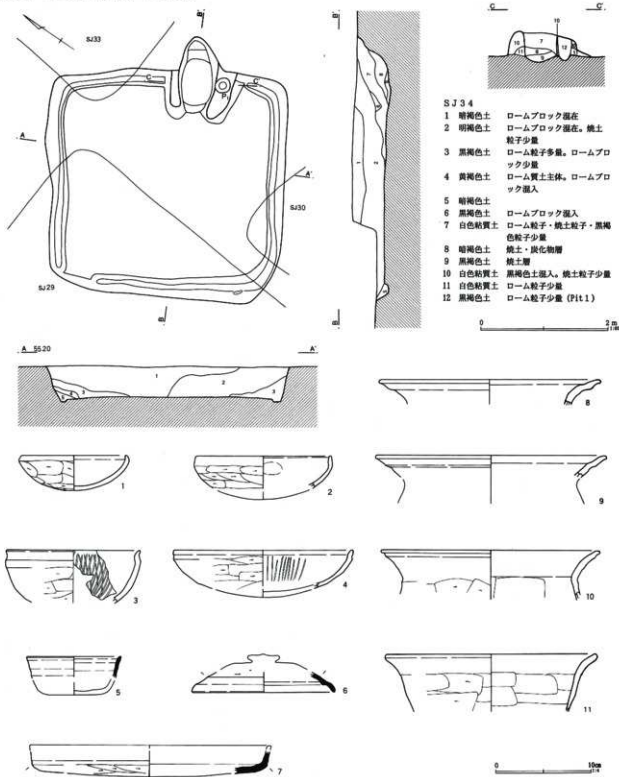
第34号住居跡は44-9グリッドに位置する。第29・30・33・92号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。平面形は方形で、規模は長軸長3.80m、短軸長3.60m、深さ0.54mである。主軸方位はN-58°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、全体に堅い。特にカマド前面から住居中央付近が良く踏み固められていた。埋土の状況について観察すると、特に第1・2層にロームブロックが霜降り状に混在し、人為的に埋め戻されたものと思われる。

カマドは北東壁に設置され、焼成部は壁を僅かに掘り込んでいる。袖は白色粘土を積み上げて構築されるがかなり流出していた。第7-9層が天井部崩落土、9層下面が火床面と推定される。

ビットは1本カマド袖部に検出されたが、住居に伴うものではない。壁溝は西コーナー部を除き全周

第53図 A区第34号住居跡・出土遺物



する。深さは5 cm程度。

出土遺物は少なく、全て小片である。器種としては、土師器杯・暗文杯・甕・甌、須恵器杯・蓋・鉢がある(第53図)。土師器杯は内屈・内彎口縁の北武

藏型杯(1・2)、3の暗文杯は内面に斜格子暗文が施される。5は小振りの須恵器杯となろう。6はかえり蓋。7は鉢で、底部は手持ちヘラケズリが施されている。8-10は土師器甕、11は甌と思われる。



第24表 A区第34号住居跡出土遺物観察表(第53図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.0)	3.7		ABCD	A	淡褐色	20%	SJ34覆土+SJ29
2	土師環	(14.2)	3.4		CE	A	褐色	20%	覆土
3	土師暗文環	(14.0)	5.5		AD	A	橙褐色	5%	覆土 内面斜格子暗文
4	土師暗文環	(18.8)	4.0		BC	A	褐色	5%	覆土。内面放射暗文
5	須恵環	(9.8)	2.3		BCE	A	灰黒色	15%	未野産
6	須恵蓋	(14.8)	2.1		CE片	A	灰色	5%	未野産
7	須恵蓋		2.4		BCE	A	灰色	5%	未野産
8	土師甕	(22.8)	2.6		ABC	A	淡褐色	5%	覆土
9	土師甕	(24.2)	2.3		ABC	A	暗褐色	5%	覆土
10	土師甕	(22.9)	5.2		ABCE	A	淡褐色	5%	覆土
11	土師甕	(22.0)	6.0		ABE	A	暗褐色	5%	覆土

遺物は小片が多く、時期決定し難いが、熊野Ⅰ～Ⅱ期の範疇で捉えて良いものと考えられる。

## A区第35号住居跡(第54図)

第35号住居跡は43・44-9・10グリッドに位置する。断面観察及び、壁溝の状況から、第36号住居跡から第35号住居跡に東壁と南壁部を縮小して建て替えられたものと判断した。重複遺構との新旧関係は、第16・25号掘立柱建物跡を切り、第33号住居跡に上面を削平されていた。

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長4.74m、短軸長3.36m、深さ0.33mである。主軸方位はN-15°-Eを指す。

床面は概ね平坦で全体に堅く締まっていた。埋土は大きく上下の2層に分かれ、上層(第1層)に多量のローム粒子が含まれていた。

カマドは北壁に設置されていた。燃焼部は壁を切り込み、一段立ち上がって煙道部に続く。袖は灰褐色の粘質土を用いているが、あまり明確なものではなかった。第1～4層が天井部崩落土、第5層が灰層、第6層は掘り方と考えられる。

ピットは5本検出されたが、いずれも住居に伴うものではない。カマド前面から土壌が1基検出された(SK1)。上面は貼床され、埋土は埋め戻された状態である。住居に伴う床下土壌と考えられる。

壁溝は東壁部が不明確であるが、他の部分は巡っていた。

出土遺物は比較的まとまっているが、床面よりも

浮いているものが多い。器種としては、土師器環・暗文環・甕・台付甕、須恵器環・皿・高台付皿・高台椀・蓋・瓶・甕、灰軸陶器、石製紡錘車がある(第54・55図)。第54図1～3は土師器環。3は体部ヘラケズリ、内面に放射状暗文が施される。4～6は須恵器蓋。4は無鈕式となろう。7～9は須恵器環、10～15は高台椀16・17は皿、18・19は高台付皿である。19の見込部は摩滅しており、硯に転用された可能性がある。20は「コ」の字状口縁甕、21～23は小型台付甕である。25は灰軸陶器皿で、外面は無軸、内面は灰釉が刷毛塗りされている。胎土から浜北産の可能性ある。26は長頸瓶、27～30は甕である。31は滑石製紡錘車で、覆土上層から出土した。

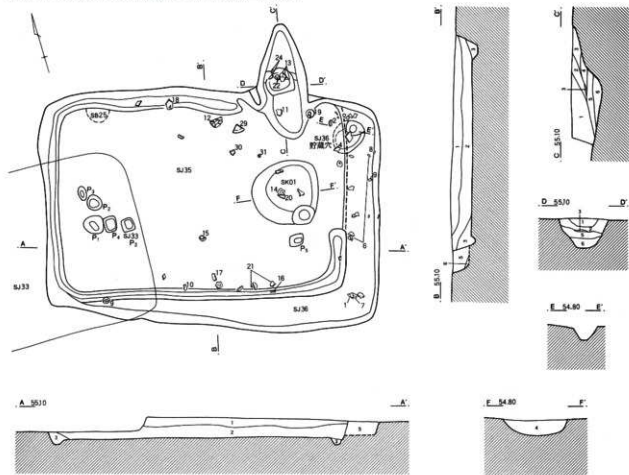
須恵器は304片出土した。環が184点(未野172・南比企12)、高台椀22点(未野)、皿が45点(未野43・不明2)、高台皿が2点(未野)、蓋が19点(未野18・南比企1)壺・瓶類8点(未野5・南比企2・不明1)、甕が23点(未野22・南比企1)鉢が1点(未野)である。その他灰軸陶器皿と瓶が各1点出土している。

時期は熊野Ⅰ期と考えられる。

## A区第36号住居跡(第54図)

第36号住居跡は43・44-9・10グリッドに位置する。断面観察及び、壁溝の状況から、第36号住居跡から第35号住居跡に東壁と南壁部を縮小して建て替えられたものと判断した。重複遺構との新旧関係は、第16・25号掘立柱建物跡を切り、第33号住居跡に上面

第54図 A区第35・36号住居跡・35号住居跡出土遺物(1)



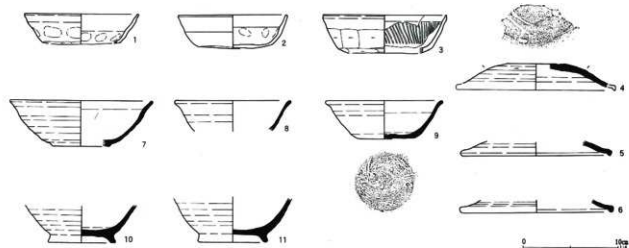
SJ35・36

- 1 明褐色土 ローム粒子多量。焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子ほとんど含まない
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量。黒色土がブロック状に混入
- 5 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量

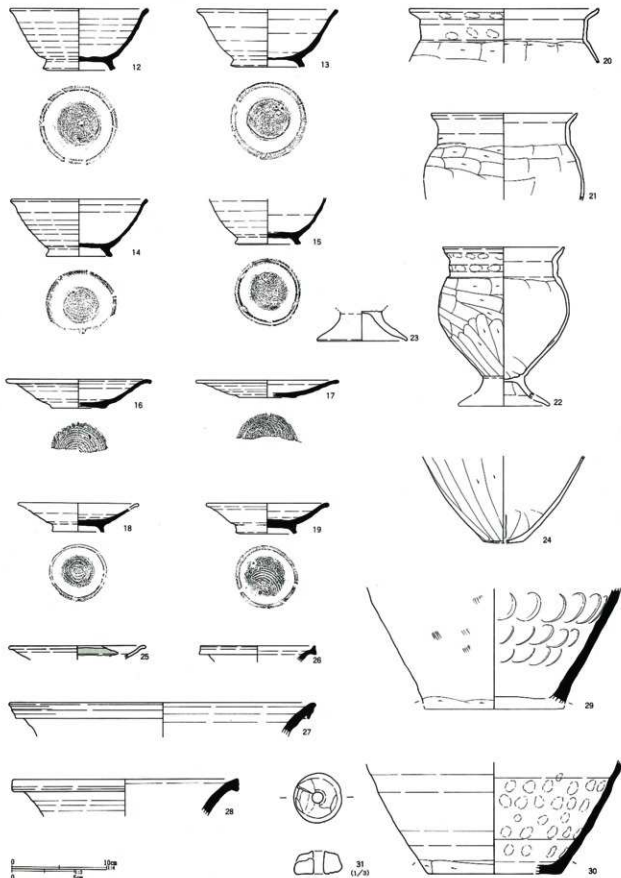
カマド

- 1 明褐色土 焼土粒子多量。ローム粒子少量
- 2 灰褐色土 粘質土主体
- 3 灰褐色土 焼土ブロック主体
- 4 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 5 黒褐色土 灰・焼土・炭化物混入
- 6 黄灰色土 粘質土・焼土粒子・ローム粒子混入

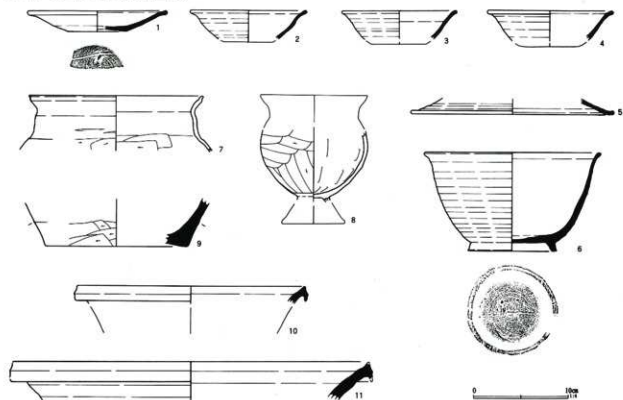
0 2m



第55图 A区第35号住居跡出土遺物(2)



第56図 A区第36号住居跡出土遺物



を削平されていた。

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長5.46m、短軸長3.70m、深さ0.25mである。主軸方位はN-19°-Eを指す。

床面は重複する第35号住居跡よりもやや浅い位置にあったようで、35号住居跡と同一レベルまで掘り下げたために掘り方で達してしまっただけで、埋土はローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土を基調とするが、特に埋め戻したような形跡は確認できなかった。

カマドは第35号住居跡のそれと同一地点に設置されたものと考えられる。貯蔵穴はカマド脇の北東コーナー部に設けられていた。楕円形で、規模は長径54cm、短径42cm、深さ23cmである。

住居に伴うピットは検出されなかった。壁溝は存在しない。

出土遺物は少なく、須恵器・蓋・高台碗・蓋・甕、土師器・甕・台付甕がある(第56図)。1は須恵器皿としたが、蓋の可能性もある。2-4は甕。5は口径が大きく、碗蓋と考えた。6は大振りの高台碗

である。7は土師器のいわゆる「コ」の字状口縁甕である。

須恵器は破片数で102点出土した。甕が84点(末野83・南比企1)、高台碗1点、皿6点、蓋1点、甕7点、壺瓶類2点、鉢1点(いずれも末野産)である。時期は熊野VI期、第35号住居跡と同一段階であろう。A区第39号住居跡(第57図)

第39号住居跡は46-10グリッドに位置する。重複する第41・48号住居跡を切っていた。第7号・第8号掘立柱建物跡との関係は、床面の遺存状態や重複する第41号住居跡カマドの断面観察から本住居跡の方が新しいものと判断した。平面形は長方形で、規模は長軸長4.80m、短軸長4.04m、深さ0.20mである。主軸方位はN-10°-Eを指す。

床面はやや起伏が顕著で、カマド前面から中央部は非常に強く踏み固められていた。一方、壁際は全体にやや軟弱であった。埋土はローム粒子やロームブロック混じりの褐色土を基調としており、すべて自然堆積とは思われない。

第25表 A区第35号住居跡出土遺物観察表(第54-55図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	土師環	(12.0)	3.1	(8.4)	AB	B	褐色	20%	覆土	
2	土師環	11.3	3.6	7.8	AB	A	茶褐色	55%	No3 覆土下層	
3	土師時文環	(13.0)	4.0		AB	B	褐色	15%	覆土。器形歪む 内面放射状文	
4	須恵蓋		2.4		C片	A	灰色	25%	No4, 覆土。未野産。天井部B0手法	
5	須恵蓋	(15.6)	1.5		B F片	C	灰色	5%	覆土。未野産	
6	須恵蓋	(15.8)	1.3		B片	B	青灰色	5%	覆土。未野産	
7	須恵環	(14.8)	4.8	(6.0)	BCF	A	灰色	10%	覆土。未野産? 片岩は確認できない。底部B0手法	
8	須恵環	(12.0)	3.2		C針	A	灰色	30%	覆土。南比企産	
9	須恵環	12.1	4.0	6.0	B片	B	暗灰色	95%	No19, 覆土。未野産。底部B0手法	
10	須恵高台輪		4.0	6.5	D片	C	明褐色	90%	No21, 覆土。未野産	
11	須恵高台輪		4.6	7.0	C片	D	黄灰褐色	70%	カマFNo4, 未野産	
12	須恵高台輪	14.4	6.5	6.8	C片	B	黄灰色	75%	No14, 床面。未野産	
13	須恵高台輪	(14.6)	6.1	6.8	B C D片	D	淡褐色	65%	カマFNo8, 未野産。	
14	須恵高台輪	(14.0)	6.0	6.8	B D片	A	灰色	25%	No9, 覆土。未野産	
15	須恵高台輪		4.8	6.0	C D片	B	黄灰色	50%	No22, 覆土。未野産	
16	須恵皿	(14.4)	3.0	6.0	B C片	B	灰褐色	25%	No29, 覆土。未野産。底部B0手法	
17	須恵皿	(14.6)	1.8	(6.0)	C片	B	黄灰色	30%	No23, 覆土。未野産。底部B0手法	
18	須恵高台皿		2.4	5.4	C片	A	青灰色	80%	No16, 覆土。未野産	
19	須恵高台皿	12.6	3.2	5.8	C片	A	紫灰色	100%	カマFNo1, 未野産。見込部磨滅	
20	土師壺	(20.0)	5.7		ABD	A	明褐色	20%	No8, 覆土	
21	土師小型台付甕	15.3	9.1		AB	A	褐色	50%	No27-28, 覆土	
22	土師小型台付甕	12.7	15.9		AB	A	淡褐色	70%	カマFNo12-13	
23	土師小型台付甕		3.1	9.4	AB	A	明褐色	90%	覆土	
24	土師壺		9.1	(4.2)	AB	A	褐色	25%	カマFNo5-14	
25	灰釉高台皿	(14.0)	1.4		B F	A	明白色	5%	覆土。浜北産。内面灰釉刷毛塗り	
26	須恵長頸瓶	(12.0)	1.7		B F	A	灰色	10%	覆土。産地不明。南比企産か。白色針未確認	
27	須恵壺	(32.0)	3.5		B C片	A	黒灰色	15%	覆土。未野産	
28	須恵壺	(23.5)	3.8		B針	A	灰色	5%	覆土。南比企産	
29	須恵壺		12.1		B片	A	灰色	25%	No13, 覆土。未野産。	
30	須恵壺		11.9	(14.0)	C片	A	明灰色	25%	No12, 覆土。未野産。	
31	滑石製紡錘車	No11, 覆土上層。直径3.8cm。高さ1.8cm。孔径0.9cm。重さ36.0g。上下底部剥落部分あり								

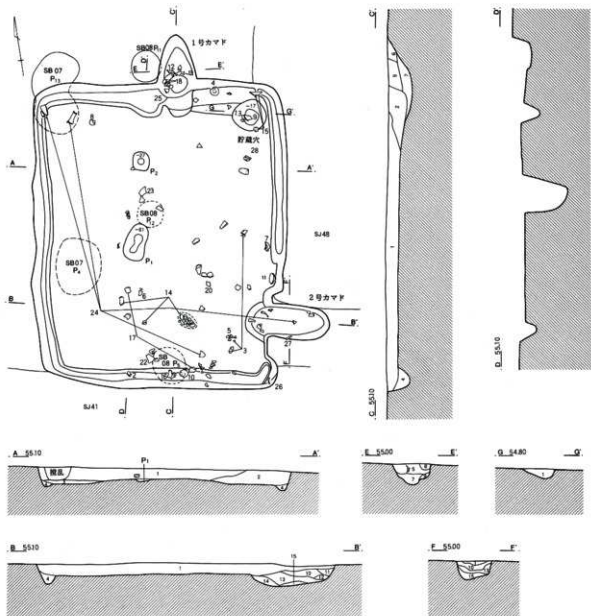
第26表 A区第36号住居跡出土遺物観察表(第56図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵皿	(14.4)	2.2	6.2	B C片	B	黄灰色	25%	No20, 覆土。未野産
2	須恵環	(12.1)	3.0		B C片	A	灰色	30%	覆土。未野産
3	須恵環	(12.0)	3.0		B C E片	B	暗灰色	15%	覆土。未野産
4	須恵環	(13.0)	3.2		B E片	A	灰色	20%	覆土。未野産
5	須恵蓋	(21.2)	1.7		片	B	黄灰色	15%	覆土。未野産
6	須恵高台輪	18.6	10.4	9.2	C片	A	黒灰色	60%	No10-17, 床面+覆土。未野産
7	土師壺	(18.3)	5.8		ABC	A	褐色	5%	No19, 覆土
8	土師小型台付甕		7.6		ABCD	A	褐色	30%	No11, 覆土
9	須恵壺		5.1	(15.0)	片	A	灰色	5%	No12, 覆土。未野産
10	須恵壺	(24.0)	1.9		B片	A	暗灰色	5%	覆土。未野産
11	須恵壺	(37.8)	4.1		B C E片	B	灰色	5%	覆土。未野産

カマドは2基検出された。北壁部に掘り込まれたものが第1号カマド、東壁部のそれが第2号カマドとする。いずれも燃焼部は壁を大きく切り込んでいた。埋土の遺存状態から1号カマドから2号カマドに付け替えたものと考えられる。

ピットは2本検出されたが、柱穴となるかどうか不明である。貯蔵穴は北東コーナー部に設置されている。ほぼ円形プランで、直径52cm、深さ17cmである。

第57図 A区第39号住居跡



SJ39

- 1 明褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 褐色土 ロームブロック多量
- 3 黄褐色土 黒色土・ロームブロック混入
- 4 褐色土 ローム粒子微量
- 5 褐色土 焼土・ローム粒子少量
- 6 明褐色土 焼土・灰・ローム粒子混入
- 7 黒褐色土 灰・炭化物・焼土混入(炭層)
- 8 灰白色粘土 ブロック状
- 9 褐色土 ローム粒子多量
- 10 明灰褐色土 粘質土・焼土ブロック多量

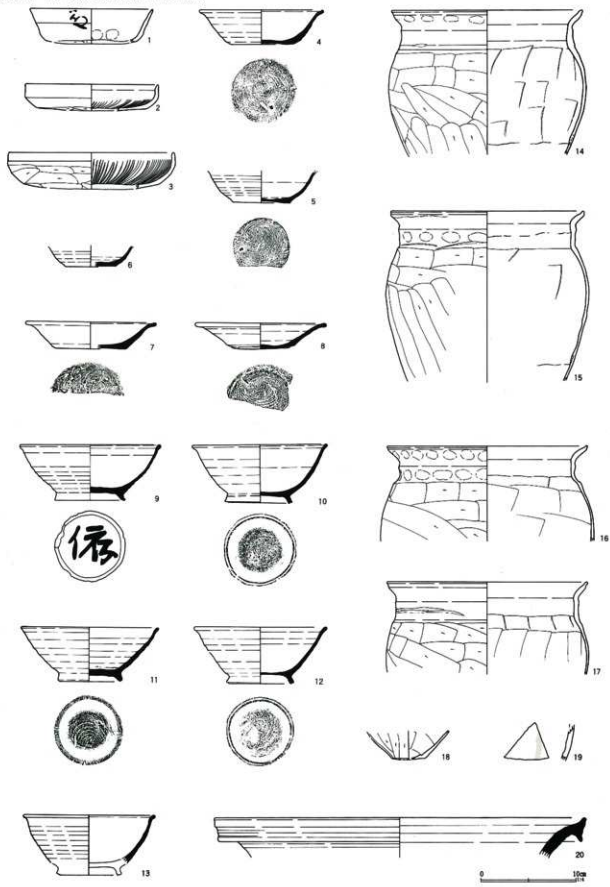
- 11 黄褐色土 ロームブロック多量
- 12 褐色土 焼土・ローム微量
- 13 黒灰色土 灰・炭化物・焼土混入(炭層)
- 14 明褐色土 ローム粒子多量
- 15 切褐色土 黄灰・粘土ブロック多量
- 貯蔵穴
- 1 明灰褐色土 粘質土・ロームブロック少量、焼土・炭化物混入

壁溝は全周するが、方形周溝状の掘り方と重なって不明瞭な部分もあった。

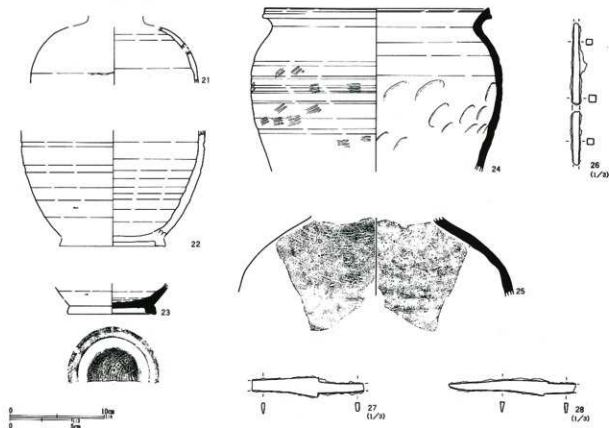
出土遺物は比較的まとまっている。土師器環・暗文環・甕、須恵器環・皿・高台碗・甕・鉢、灰釉陶器長頸瓶、鉄製品がある(第58・59図)。1は土師器

環で、外面に墨書痕がある。字は不明瞭であるが、「殿」の可能性が有る。2・3の暗文環は混入と思われる。4～6は須恵器環で、底部は回転糸切り後無調整。7・8は皿。7は焼きが甘い。9～13は須恵器高台碗。9は貯蔵穴内から出土した。底部に大

第58图 A区第39号住居跡出土遺物(1)



第58図 A区第39号住居跡出土遺物(2)



第27表 A区第39号住居跡出土遺物観察表 (第58-59図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(13.0)	3.5		A	A	褐色	10%	覆土。外面墨書「順」と思われる
2	土師暗文環	(14.0)	2.7	(11.6)	ABD	A	黄褐色	20%	No.21。覆土。内面放射暗文
3	土師暗文環	(17.4)	3.8		AB	A	茶褐色	30%	No.3-34他。覆土。内面放射暗文
4	須恵環	12.9	3.6	6.6	片	B	黄灰褐色	95%	No.62。覆土。未野産。底部B0手法
5	須恵環		3.3	6.0	C片	A	明灰色	60%	No.32。覆土下層。未野産。底部B0手法
6	須恵環		2.1	(5.4)	B片	A	青灰色	40%	No.27。覆土。未野産。底部B0手法
7	須恵皿	(13.6)	2.8	7.4	D片	D	暗灰褐色	35%	No.41。覆土。未野産。770目強い
8	須恵皿	(13.4)	2.7	(6.2)	C片	A	暗青灰色	25%	No.64。覆土。未野産。底部糸切り面2枚あり
9	須恵高台椀	(14.6)	5.8	7.2	C片	C	灰褐色	50%	No.73。貯蔵穴内。未野産。底部墨書あり
10	須恵高台椀	14.1	6.2	6.5	B片	B	青灰色	90%	No.16。S B08内。未野産
11	須恵高台椀	14.4	5.6	6.3	片	C	黄灰褐色	75%	No.39。床面。未野産。外面焼きむらあり
12	須恵高台椀	(13.8)	5.9	6.4	C片	A	淡灰色	50%	1号カマFNo.9。未野産。底部に孔が穿たれている
13	須恵高台椀	(13.6)	5.0		C片	A	灰色	30%	No.72-74。貯蔵穴内。未野産
14	土師甕	(20.0)	15.1		AB	A	明茶褐色	40%	No.29-30他。覆土。整形やや雑。口縁下無調整部残す
15	土師甕	(20.3)	18.0		AB	A	褐色	15%	No.59-60。床面
16	土師甕	(21.0)	10.0		AB	A	褐色	20%	No.17-18。S B08内
17	土師甕	(21.0)	9.7		AB	A	褐色	25%	No.15-26。覆土
18	土師甕		3.0		AB	B	明褐色	65%	1号カマFNo.1
19	灰軸長頸瓶				F	A	明灰色		堀り方。狼投～三河産。内面に450-500目程度の吹出し
20	須恵甕	(39.0)	4.2		C片	A	暗灰色	5%	No.47。覆土。未野産。口径不安定
21	灰軸長頸瓶				B F	A	灰白色	5%	覆土。狼投産か。外面淡黄緑色の軸
22	灰軸長頸瓶		11.2		C F	A	灰白色	25%	No.75。床面。狼投～三河産か。外面回転ヘラケズリ
23	須恵長頸瓶		3.2	9.2	B F	A	紫灰色	50%	No.52。覆土。東金子産。底部回転糸切り
24	須恵鉢	(23.6)	17.3		C片	A	青灰色	35%	No.8-65他。覆土。未野産



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
25	須恵甕		8.3		C片	A	灰色	20%	1号カマF№5。未野産
26	不明鉄製品	№1。床面。残長10.6cm。棒状							
27	刀子	№58。床面。残長8.8cm。切先・柄部欠失							
28	刀子	№69。2号カマF。残長10.1cm。柄部欠失							

きく「俯」の墨書が記されている。14～18は土師器のいわゆる「コ」の字状口縁甕である。19・21・22は灰釉陶器長頸瓶の破片である。20・25は須恵器甕、24は鉢である。10・16は第8号掘立柱建物跡柱穴内に納まるが、本来本住居跡に帰属するものであろう。

須恵器は252片出土し、環が151点（末野145・南比企6）、皿が12点（末野）、高台碗25点（末野）、壺・瓶類16点（末野6・東金子1・産地不明9）、甕33点（末野）、鉢5点（末野）、蓋9点（末野）、器種不明1点（末野）である。灰釉陶器は5点出土し、碗が1点、瓶が4点となる。須恵器環が主体で、高台碗と皿を伴う。大振りの碗はなく、蓋も定量存在とはいえない。時期は熊野Ⅶ期後半と考えられる。

#### A区第40号住居跡（第60図）

第40号住居跡は46・47-10グリッドに位置する。遺構の大半は町教育委員会調査区にあり、北東コーナー部分が調査されたに過ぎない。重複遺構との新旧関係は、第9号住居跡、第41号住居跡を切っている。平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸長4.18m、短軸長1.44m、深さ0.25mである。主軸方位はN-98°-Eを指す。

残存部の床面は概ね平坦である。埋土の状況は不明確である。

カマドは調査区内には検出されなかった。ピットは調査区内から1本検出された。第41号住居跡の柱穴と重複しており、埋土上部から須恵器環が2枚と土師器甕破片が重なって出土した。土壌は2基あり、掘り方または、床下土壌と思われる。

壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器環（第61図1・2）、内黒碗（3）、須恵器環（4～8）、灰釉長頸瓶（9）、須恵器蓋（10～12）、須恵器碗（13）、土師器甕（15・16）、小型甕

（17）がある。3は口縁部外面に沈線を一列巡らし、内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。4・5の須恵器環は2枚重なった状態で出土した。底部は回転糸切り後無調整である。9は灰釉陶器長頸瓶である。接合しない破片から復元実測した。13は高台碗と思われる。14は器種が良くわからない。口縁整形されるが、酸化焰焼成である。時期は熊野Ⅶ期と考えられる。

#### A区第41号住居跡（第60図）

第41号住居跡は46・47-10グリッドに位置する。重複する第8号掘立柱建物跡を切り、第39・40・42号住居跡に切られていた。第9号住居跡との関係は不明確である。住居南半は町教育委員会によって調査されており、また、重複遺構の攪乱を受け、遺構の遺存状態はあまり良くない。

平面形は、方形と考えられる。推定規模は長軸長6.30m、短軸長6.10m、深さ0.12mである。主軸方位はN-7°-Eを指す。

床面は概ね平坦で堅く締まっていた。埋土は焼土粒子を含む褐色土を基調としており、カマド前面にはカマドから流出したと思われる白色粘土が広がっていた。

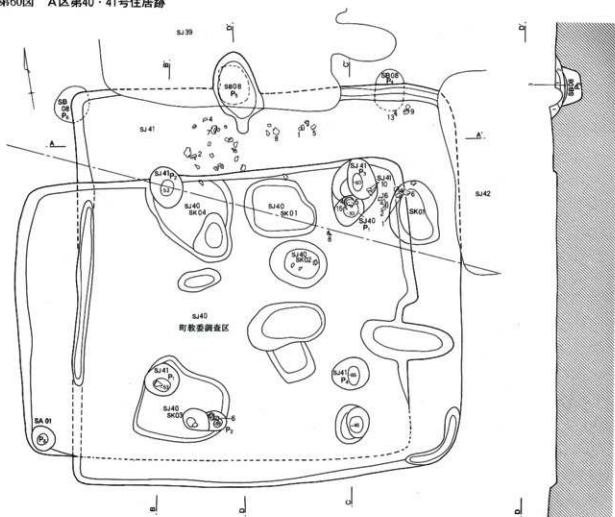
カマドは北壁のほぼ中央に設置されているが、第39号住居跡に上面を削平され、第8号掘立柱建物跡柱穴に燃焼部中央を掘り抜かれていた。

ピットは4本規則的に配され、主柱穴を構成している。土壌は1基検出された。掘り方の一部かもしれない。

壁溝は部分的に検出されたが、全体に巡っていたかどうかは不明確である。

出土遺物は、土師器環（第62図1～5）、暗文環（8～11）、甕（12）、須恵器蓋（6）、環（7）、鉄製品

第60図 A区第40・41号住居跡



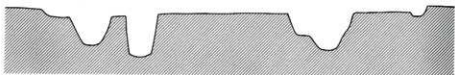
. A .S5.20



. B .



. C .



. A' .

. B' .

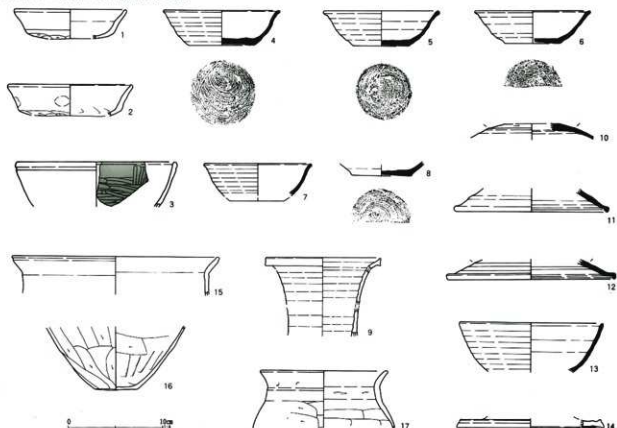
. C' .

SJ 41

- 1 明褐色土  
粘質土 ロームブロック・  
焼土粒子混入
- 2 明褐色土  
粘質土 焼土ブロック混入
- 3 黒褐色土  
灰・炭化物多量 焼土粒子  
少量含む

0 2m

第61図 A区第40号住居跡出土遺物



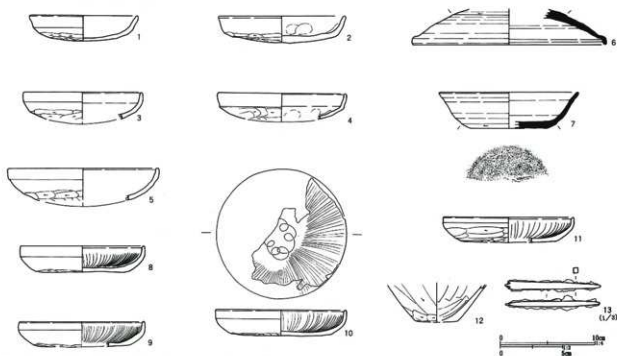
第28表 A区第40号住居跡出土遺物観察表 (第61図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師杯	(11.8)	3.1		BC片	A	褐色	25%	No45. 覆土
2	土師環	(13.0)	3.3		ABCD	A	褐色	5%	No1. 覆土
3	土師内黒碗	(16.9)	4.7		ABCD	A	明褐色	5%	覆土。内面黒色処理
4	須恵環	12.3	3.7	7.0	BCE片	B	灰褐色	80%	No41. Pit1上層。末野産。底部B0手法
5	須恵環	12.1	3.7	5.8	BCE片	A	灰色	75%	No39. Pit1上層。末野産。底部B0手法
6	須恵環	(12.1)	3.4	(6.0)	BCE片	A	灰黒色	30%	Pit2上層No1. 末野産。底部B0手法
7	須恵環	(11.3)	3.5		BCE片	A	灰色	25%	覆土。末野産
8	須恵環		1.6	6.4	BCE片	B	黄灰色	50%	No5. 床面。末野産
9	灰輪長頸瓶	12.0	8.3		EF	A	明灰色	15%	覆土。東濃産? 接合しない2片を合成
10	須恵蓋		1.7		BE片	A	灰色	30%	覆土。末野産
11	須恵蓋	(16.0)	2.4		BCD片	D	灰褐色	5%	覆土。末野産
12	須恵蓋	(17.7)	2.1		BCD片	B	灰褐色	5%	覆土。末野産
13	須恵高台碗	(15.1)	5.2		CE片	A	灰色	15%	SK01. 末野産
14	土師器種不明		0.9	15.6	BDE	B	褐色	5%	No12. 覆土。ロクロ整形
15	土師甕	(21.8)	4.0		ABCD	A	褐色	10%	No40. 覆土
16	土師甕		6.7	4.4	ABCD	A	褐色	30%	No1. 覆土
17	土師小型甕	(13.4)	6.0		ABCD	A	褐色	15%	覆土

(13)がある。土師器杯は北武蔵型で、扁平な器形が主体となる(1・2・4)。暗文環は平底タイプで、10にみられるように内面ラセン放射暗文を基本とする。8・9・11は螺旋暗文の有無が不明確であるが、おそらく施文されているものと思われる。

体部は無調整(ナデ)とヘラケズリを施すもの(11)の両者がある。須恵器杯(7)は底部と体部下端がヘラケズリされるが、ケズリは浅く底部はナデられているかもしれない。末野産。13は先端が三叉状になる不明鉄製品。時期は熊野Ⅲ期古相である。

第62図 A区第41号住居跡出土遺物



第29表 A区第41号住居跡出土遺物観察表 (第62図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.4)	2.7		ABCD	A	褐色	30%	No11. 床面
2	土師環	13.3	2.8		ABC	A	褐色	55%	No18. 覆土。内面指押瓦痕
3	土師環	(12.4)	2.8		ABC	A	褐色	25%	覆土。
4	土師環	(13.4)	2.7		ABC	A	褐色	5%	No2. 覆土。指押痕
5	土師環	(15.7)	3.4		ABCD	A	褐色	15%	No13. 覆土下層
6	須恵蓋	(20.3)	3.8		BCDE	B	淡褐色	25%	No12. ほぼ床面。未野産か
7	須恵環	14.7	3.8	(8.4)	BE片	A	灰色	45%	No3. 覆土。未野産。底部3C手法
8	土師暗文環	(13.0)	2.7	10.0	ABCD	A	褐色	35%	No10. 覆土下層。内面放射暗文
9	土師暗文環	13.0	2.6	10.0	BCD	A	褐色	40%	No15 No17. 覆土。内面放射暗文
10	土師暗文環	13.8	2.7	10.6	BCD	A	褐色	45%	No42. Pit 3内。内面放射+ツレ暗文
11	土師暗文環	(13.6)	2.6	(10.0)	ABCD	A	淡褐色	20%	覆土。内面放射暗文
12	土師鏝		4.6	4.5	ABCD	A	淡褐色	30%	覆土
13	不明鉄製品	No14. 残長7.5cm。先端三叉状							

A区第42号住居跡 (第63図)

第42号住居跡は46・47-10・11グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第41・47号住居跡を切り、カマド先端を第5号溝跡に切られていた。掘り込みが浅く、確認段階で床面が露出していた。平面形は不整形で、規模は長軸長3.72m、短軸長3.24m、深さ0.05mである。主軸方位はN-107°-Eを指す。

方形周溝状の掘り方をもつため、住居中央部の床面は非常に堅く踏み固められていた。一方、壁際はやや軟弱で僅かに沈下していた。

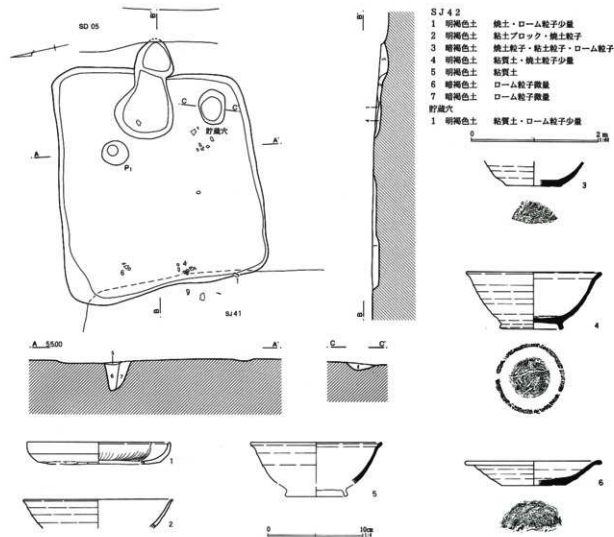
カマドは東壁のほぼ中央部に設置されているが、

遺存状態は悪い。焼成部は壁を切り込んでおり、焚口部前には掘り方と思われる浅い土壌が掘り込まれている。袖部は検出されなかった。

ピットは1本検出されたが、伴うか否か不明である。貯蔵穴と思われるピットはカマド脇のコーナー部にある。長径36cmの楕円形で、深さは10cmと浅い。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、土師器暗文環 (第63図1)、灰軸陶器碗 (2)、須恵器環 (3)、高台碗 (4・5)、皿 (6) がある。出土量は少ないが、ほとんど床面、または掘り方から検出されている。1の平底暗文環は混入

第63図 A区第42号住居跡・出土遺物



第30表 A区第42号住居跡出土遺物観察表 (第63図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師暗文坏	(15.0)	2.3	(12.8)	ABD	A	茶褐色	20%	No7. 内面放射暗文
2	灰軸碗	(15.6)	3.0		F	A	灰白色	10%	覆土。東濃産。内面のみ施釉か
3	須恵坏		2.6	(6.0)	B片	B	灰色	20%	掘り方。末野産。底部B0手法
4	須恵高台碗	14.0	6.0	6.1	F片	C	淡灰色	70%	No5. 床面。末野産。整形輪で歪みあり
5	須恵高台碗	(13.6)	4.3		B片	B	青灰色	10%	掘り方。末野産。ロクロ目弱い
6	須恵皿	(13.8)	2.5	(6.8)	片	C	淡灰色	25%	No5. 床面。末野産

と考えられる。重複する第41号住居跡に帰属するものであろう。2は東濃産の灰軸陶器碗と思われ、きめ細かい緻密な胎土をもつ。釉の発色が悪く施釉範囲は不明瞭であるが、外面は無釉、内面のみ刷毛塗りしている可能性がある。

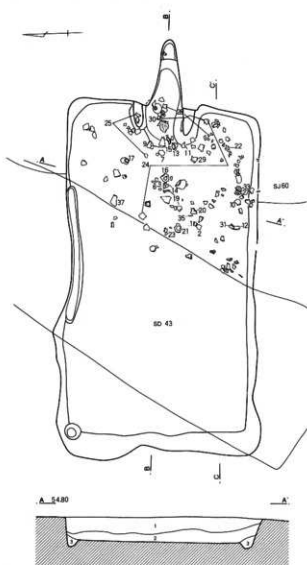
須恵器は破片数で108片出土した。内訳は坏が73点(末野70・南比企1・不明2)、高台碗5点(末野)、皿7点(末野)、甕18点(末野)、蓋5点(末野4・

南比企1)となる。時期は熊野VI期新相と考えられる。

A区第43号住居跡 (第64・65図)

第43号住居跡は46・47-11・12グリッドに位置する。重複する第60号住居跡を切り、第43号溝跡に切られていた。住居西半は町教育委員会によって調査されている。平面形は縦長の長方形で、規模は長軸長5.40m、短軸長3.20m、深さ0.42mである。主軸方位は

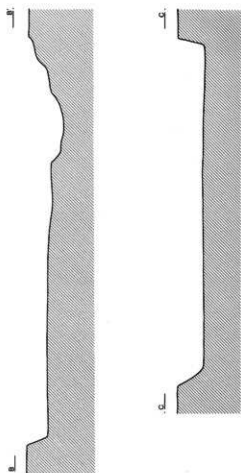
第64図 A区第43号住居跡



N-94° - Eを指す。

床面は平坦で堅く締まっているが、第60号住居跡との重複部はやや沈下していた。住居埋土は2層に分かれ、焼土・ローム混じりの黒褐色土を基調としており、大きな差異はない。

カマドは東壁中央に設置される。燃焼部から煙道部は壁外に長く延びる。燃焼部中央の北壁に寄った位置には、土師器小型台付甕が倒立状態で据えられていた。支脚に転用された可能性があろう。袖部は茶褐色土や黒色土の上に白色粘土を積み上げて構築されている。右袖部には片岩系の板石が埋設されていた。また、焚口部中央付近には面取りされた石材



SJ43

- |   |      |              |
|---|------|--------------|
| 1 | 黒褐色土 | 焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 2 | 黒褐色土 | 焼土粒子・ローム粒子微量 |
| 3 | 黒色土  | 焼土粒子・ローム粒子微量 |

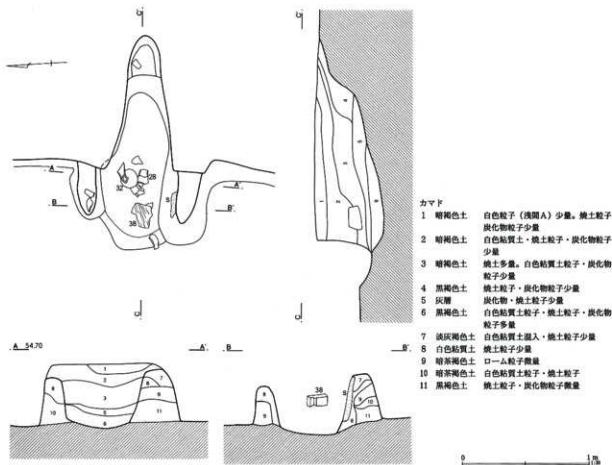
0 2m

が検出された。一側面と端面が被熱しており、左袖の袖石に使用されていたものかもしれない。埋土は第5層が灰層、第2～4層が天井部崩落土と考えられる。

ビットは北西コーナーに1基検出された。壁溝は北壁部で部分的に検出されたに留まる。

出土遺物は比較的多い。全て破片で、上層から下層まで満遍なく出土している。投棄された可能性が高いであろう。器種としては土師器杯・甕・小型台付甕、須恵器小型杯・皿・高台碗・長頸瓶・甕、灰釉陶器段皿・長頸瓶、鉄製品などが出土した(第66・67図)。土師器杯は体部無調整のタイプ(1・2)と

第65図 A区第43号住居跡カマド



- カマド
- 1 暗褐色土 白色粒子（浅間A）少量、焼土粒子、炭化物粒子少量
  - 2 暗褐色土 白色粘質土・焼土粒子・炭化物粒子少量
  - 3 暗褐色土 焼土多量、白色粘質土粒子・炭化物粒子少量
  - 4 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
  - 5 灰層 炭化物・焼土粒子少量
  - 6 黒褐色土 白色粘質土粒子・焼土粒子・炭化物粒子多量
  - 7 淡灰褐色土 白色粘質土混入、焼土粒子少量
  - 8 白色粘質土 焼土粒子少量
  - 9 暗茶褐色土 ローム粒子少量
  - 10 暗茶褐色土 白色粘質土粒子・焼土粒子
  - 11 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量

体部がヘラケズリされるもの（3・4）の2種類がある。須恵器坏は浅身のもの（5・6）のみで、深身の無台坏は含まれない。無台皿は3点ある（8～10）。須恵器高台碗は供膳器の主体を占め（11～22）、口径14～15cm前後の中型品を中心に、口径17cmの大型品、口径11.4cmの小型品がある。26は灰釉陶器段皿と思われる。高台は高くしてしっかりしている。底部から体部は回転ヘラケズリ。灰釉は刷毛塗りと思われる。胎土は緻密で、東濃産、光ヶ丘1号窯式新段階に比定されよう。27は灰釉陶器長頸瓶で、内面には黒色粒子の吹き出しが見られる。釉調は淡い緑色をベースに白濁した部分がある。東海西部産か。

土師器甕はコの字状口縁を呈するもの（29）とコの字が崩れ器壁が厚くなったもの（28・30）の両者がある。32は小型台付甕で、カマド内から逆位に出土した。支脚に転用されたものかもしれない。38は

四角に面取りされた角閃石安山岩で、一側面と一端面が被熱していた。カマド内から出土したもので、袖石に使用された可能性が高い。

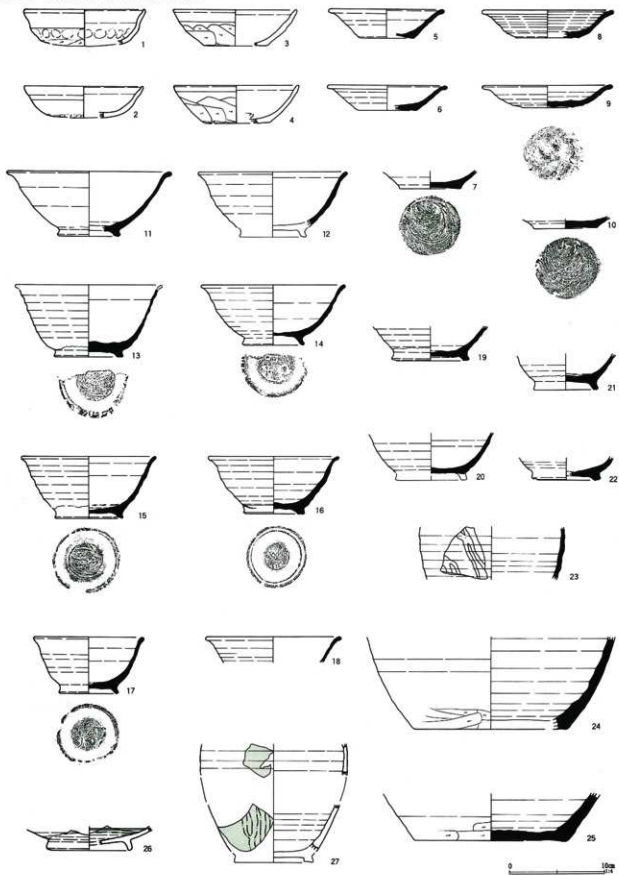
須恵器は397片出土した。坏・高台碗が290点（末野産288点・南比企産2点）あり、このうち高台碗と特定できるものが89点含まれる。皿は10点（末野産）、蓋は8点（末野産）、壺瓶類は5点（末野産2・南比企産2、不明1）、甕は79点（末野産76・南比企2・不明1）、鉢は5点（末野産）出土した。

時期は熊野Ⅴ期と考えられる。

#### A区第44号住居跡（第68図）

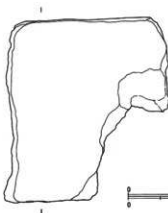
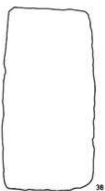
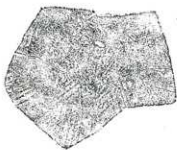
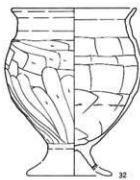
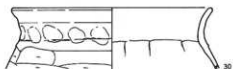
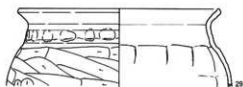
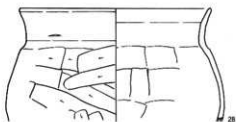
第44号住居跡は46-10・11グリッドに位置する。第47・48・49号住居跡を切り、北東コーナー部を僅かに第11号溝跡に削平されている。平面形は、縦長の長方形で、規模は長軸長4.86m、短軸長3.00m、深さ0.22mである。主軸方位はN-87°-Eを指す。

第66图 A区第43号住居跡出土遺物(1)





第67图 A区第43号住居跡出土物(2)



第31表 A区第43号住居跡出土遺物観察表(第66-67図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(12.6)	3.6	(9.4)	AB	A	黄褐色	20%	No20
2	土師環	(12.4)	3.2		ABG?	A	褐色	20%	No18
3	土師環	(12.8)	3.7	(6.6)	AB	A	橙褐色	15%	覆土
4	土師環	(13.0)	4.0	(6.8)	ABD	A	明褐色	20%	カマド
5	須恵環	(11.8)	3.0	(5.6)	F片	B	灰色	30%	覆土。末野産。環と皿の中間形態
6	須恵環	(12.2)	2.6	(6.0)	BD	C	暗灰褐色	20%	No114。厚手で焼き甘い
7	須恵環		1.9	6.4	C片	A	灰色	90%	No70。末野産。底部B0手法
8	須恵皿	(13.4)	2.9	(6.6)	B片	D	灰褐色	15%	カマド掘り方。末野産
9	須恵皿	13.4	2.3	5.4	C片	D	灰褐色	50%	No71。末野産。底部指頭痕。焼き悪い
10	須恵皿		1.2	6.8	D片	B	褐色	90%	No33。末野産
11	須恵高台碗	17.0	6.8	6.2	BCD片	C	灰褐色	50%	No66他。末野産
12	須恵高台碗	(15.5)	5.8		C片	B	灰色	30%	No17。末野産
13	須恵高台碗		7.0	(7.0)	C片	B	黄灰色	25%	No68。末野産
14	須恵高台碗	(15.0)	6.3	6.2	C F片	B	灰色	40%	No84。末野産。胎土肌目粗く小石の抜けた小穴多い
15	須恵高台碗	(14.0)	6.5	7.0	C片	D	暗灰褐色	30%	カマドNo10。末野産。高台難な作り
16	須恵高台碗	13.7	6.0	6.0	BC片	D	淡褐色	75%	No82。末野産
17	須恵高台碗	(11.4)	5.9	5.8	C片	D	黄灰褐色	65%	No77。末野産。内面重ね焼きと思われる粘土層あり
18	須恵高台碗	(14.0)	2.7		C片	A	青灰色	20%	覆土。末野産。高台が付くと思われる。
19	須恵高台碗		3.6	7.1	C D	B	黄灰色	40%	No88-131。末野産
20	須恵高台碗		4.3		B D片	C	黄灰色	45%	No22。末野産。内面油漚付着
21	須恵高台碗		3.7	6.4	C片	B	灰褐色	90%	No89。末野産。内面重ね焼き痕あり
22	須恵高台碗		2.5	(6.1)	C片	B	淡灰色	35%	No129。末野産。内面黒色有機物の皮膜ができています
23	須恵長頸瓶		5.6	B	B	B	淡青灰色	10%	No118。産地不明。外面自然釉垂れる
24	須恵甕		9.7	(16.0)	片	C	黄灰褐色	20%	No61-94。末野産。
25	須恵甕		5.0	(16.0)	C片	C	黄灰褐色	10%	No72 カマドNo2。末野産。軟質
26	炭輪状皿		2.5	(8.4)	F	A	明灰色	20%	覆土。東濃産。灰釉刷毛塗。底部回転ヘラケズリ
27	炭輪長頸瓶	(11.4)			F	A	灰白色	15%	No35。覆土。東海西部産か
28	土師甕	20.0	11.9		BD	A	茶褐色	15%	カマドNo6 No59
29	土師甕	(21.0)	8.2		AB	A	茶褐色	25%	No138
30	土師甕	(21.0)	6.5		ACD	A	明褐色	30%	カマドNo7-12 No137
31	土師小型台付甕	(12.7)	4.3		AB	B	褐色	30%	No15-16
32	土師小型台付甕	(12.9)	16.9		AC	B	黄褐色	95%	カマドNo11
33	土師小型台付甕		5.5	8.0	A	A	黄褐色	80%	No125。
34	土師甕		1.7	(4.0)	AB	A	明褐色	30%	覆土
35	刀子	No23。残長16.7cm。茎先、切先欠失							
36	須恵甕				C片	B	灰色		覆土。末野産。平行印き後付
37	須恵甕				C片	B	淡灰色		No98。末野産。平行印き後付
38	切石	最長19.1cm。重さ2825g。角閃石安山岩。淡褐色～明褐色で、2面が被熱している							

床面は中央部が高く周囲がやや低くなる。また、第49号住居跡埋土上に床面を構築したために、南東部の床面は沈下していた。全体に堅く踏み固められており、カマド前面は特に堅く締まっていた。住居中央部から東部にかけて、床面の被熱部分が8箇所検出されたが、性格は不明である。

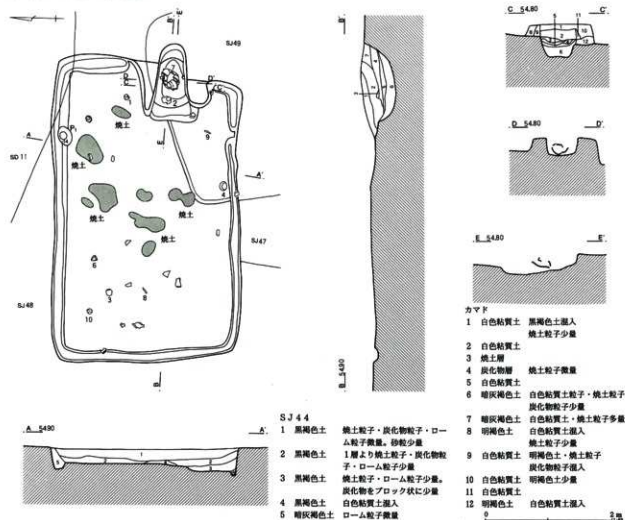
埋土は焼土・炭化物粒子混じりの黒褐色土を基調としていた(第1～3層)。

カマドは東壁に設置され、その左右で壁ラインが

ずれている。燃焼部は壁を切り込んでおり、先端は急角度で立ち上がる。底面は鍋底状に掘り込まれていた。袖は明褐色土の上に白色粘土を積み上げて構築されていた(第8～12層)。第1～3層は天井部崩落土で、カマド前面に広範囲に流出していた。第4層が灰層と考えられる。第5・6層は掘り方埋土である。

ピットは1本検出されたが、住居に伴う柱穴ではなかろう。壁溝はカマドを除き、概ね全周する。

第68図 A区第44号住居跡



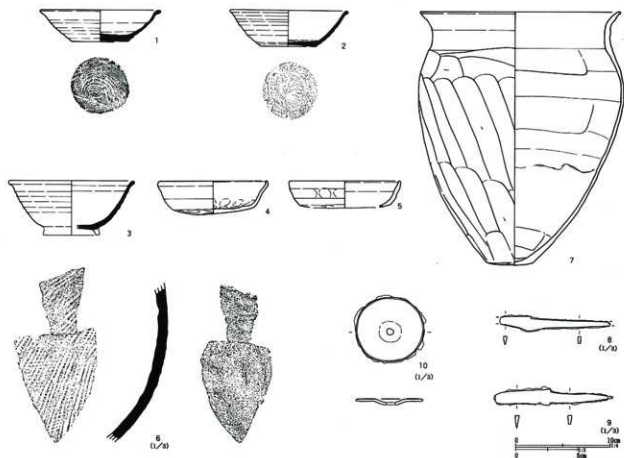
第32表 A区第44号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵環	12.6	3.3	5.9	C片	A	暗青灰色	90%	№1。覆土下層。末野産。外面紫灰色。底部B0手法
2	須恵環	(12.3)	3.8	5.9	C片	C	灰褐色	45%	カマF内№3。末野産。底部B0手法
3	須恵高台椀	(13.0)	5.1		C片	C	暗灰色	30%	№14。覆土上層。高台剥落。末野産
4	土師環	11.4	3.5	8.5	AB	A	褐色	100%	№4。覆土。外側面黒色煤状物質付着
5	土師環	(11.6)	2.8		AB	A	褐色	10%	確認面
6	須恵甕				B片	B	灰色		№11。覆土下層。末野産。外面平行叩き
7	土師甕	21.1	26.7	4.8	B C D	A	淡褐色	95%	カマF内№1
8	刀子	№12。覆土。残長8.8cm。刃部、柄部先端欠失							
9	刀子	№3。覆土上層。残長9.0cm。刃部・柄部先端欠失							
10	鉄製紡錘車	№15。覆土上層。径5.3cm。厚さ0.2cm							

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・高台椀・甕、鉄製刀子・紡錘車がある(第69図)。2の須恵器環と7の甕はカマド内から出土した。7はほぼ完形で、火床面に横倒しの状態で残されていた。その他の遺物は全て床面よりも浮いた状態で検出された。1・2は末野産の無台環。底部は回転糸切り後、無調整

である。3は高台椀であるが、高台が剥落している。4・5は土師器環。底部に指頭痕が顕著に残る。6は須恵器甕片。外面平行タキ、内面無文当て具である。7は「コ」の字状口縁甕である。8・9は鉄製刀子。刃部と柄部を欠く。10は鉄製紡錘車の紡輪と思われる。軸を欠いている。

第69図 A区第44号住居跡出土遺物



須恵器は102片出土した。内訳は坏が51点（末野産49・南比企産2）、（高台）碗5点（末野）、蓋8点（末野）、甕27点（末野）、壺瓶類9点（末野）、器種不明2点（産地不明）となる。時期は熊野V期～VI期と考えられる。

#### A区第45号住居跡（第70図）

第45号住居跡は45・46-11グリッドに位置する。住居東半は町教育委員会によって調査されている。重複遺構との新旧関係は、第48号住居跡・第63号住居跡を切り、第5号溝跡・第11号溝跡によって中央部を削平されていた。また、第37号掘立柱建物跡は本住居跡床面を切っていた。

平面形は長方形で、規模は長軸長5.02m、短軸長4.62m、深さ0.42mである。主軸方位はN-90° - Eを指す。

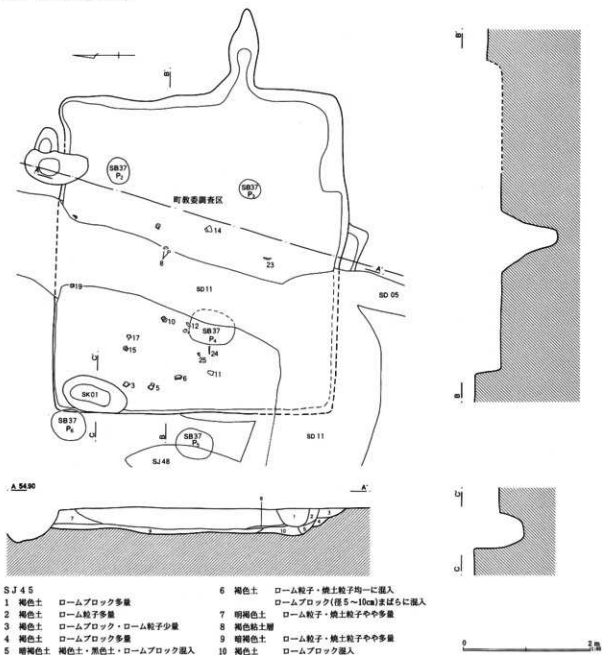
残存部の床面は概ね平坦で、貼床されていた。中

央部は強く縮まっていたが、西壁際はやや軟弱だった。埋土はローム粒子・焼土粒子混じりの褐色土を基調としている（第6・7層）。第8層は貼床、第9層上面が床面である。

カマドは東壁に設置されており、町教育委員会によって調査されている。住居に伴うピットは検出されなかった。土壌は1基西壁際に検出されたが、伴うか否か不明である。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・皿・暗文坏、須恵器坏・高台碗・蓋・高盤・脚付盤・長頸瓶・短頸壺・コップ型土器・甕、土製支脚、鉄製品などがある（第71図）。8の須恵器坏と15の脚付盤以外は覆土から出土した。5・8は末野産の須恵器坏で、底部は回転糸切り後再調整している。6は南比企産の坏で軽量感がある。やはり底部は回転糸切り後再調整している。10は末野産の碗蓋で、天井部外面に二重丸状の刻印が押さ

第70図 A区第45号住居跡



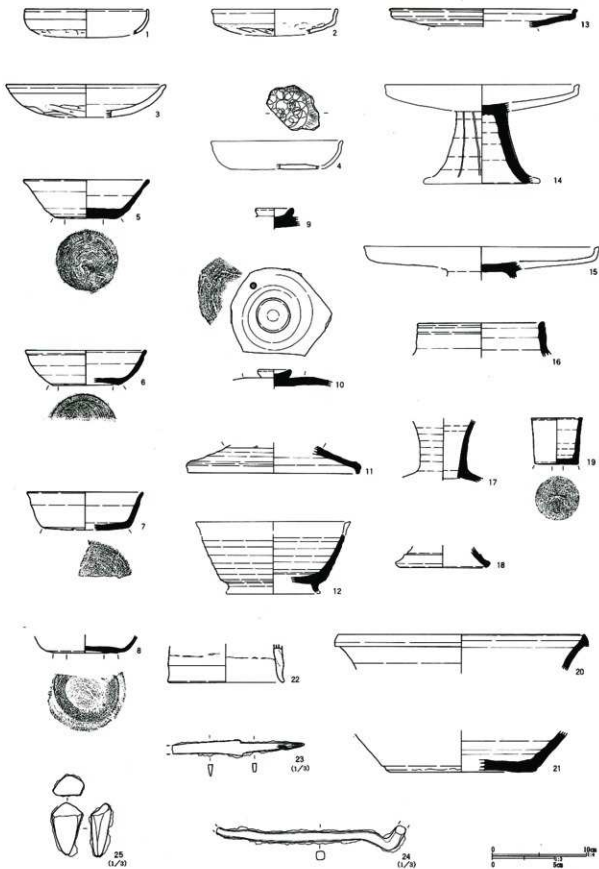
- |        |         |                        |
|--------|---------|------------------------|
| SJ 4 5 | 6 褐色土   | ローム粒子・焼土粒子均一に混入        |
| 1 褐色土  | 7 明褐色土  | ロームブロック(厚5~10cm)まばらに混入 |
| 2 褐色土  | 8 褐色粘土層 | ローム粒子・焼土粒子やや多量         |
| 3 褐色土  | 9 暗褐色土  | ローム粒子・焼土粒子やや多量         |
| 4 褐色土  | 10 褐色土  | ロームブロック混入              |
| 5 暗褐色土 |         |                        |

れている。46-11グリッド出土の須恵器高台碗に全く同一の刻印をもつもの(第330図4)があり、本来セット関係にあったことを示すものと考えられる。12は末野産の高台碗で、焼きも良く重厚なつくりである。腰が強く張っている。13・14は高盤。14は脚部に2本一単位の刻線が四方に配されている。15は脚付盤と思われる。底部外面の剥落部には回転ヘラケズリ痕がみえる。内面は不定方向のナデ調整。17は南比企産の長頸瓶。肩部接合部で剥落している。

19は南比企産のコップ型土器。完形品で、底部は回転糸切り後周辺部を再調整している。23は刀子。24は棒状鉄器。25は楔状の鉄製品である。3・7は混入品と思われる。

須恵器は162片出土した。内訳は坏が107点(末野産100・南比企産7)、碗類3点(末野)、蓋15点(末野13・不明2)、盤類3点(末野)、壺瓶類3点(末野2・南比企1)、コップ型土器1点(南比企)、甕30点(末野28・南比企2)となる。末野産が9割を

第71图 A区第45号住居跡出土遺物



第33表 A区第45号住居跡出土遺物観察表 (第71図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(12.9)	2.6		B	B	淡褐色	15%	覆土
2	土師環	(13.0)	2.6		A B	B	褐色	15%	覆土
3	土師皿	(16.7)	3.5		A B	A	明褐色	15%	No1. 覆土。暗文なし
4	土師暗文環				B	A	赤褐色		覆土。放射十ラセン暗文
5	須恵環	(13.0)	4.1	6.4	C片	A	灰色	50%	No3. 覆土。末野産。底部B3d手法
6	須恵環	(12.6)	3.7	(7.0)	B針	A	黄褐色	30%	No2. 覆土。南比企産。底部B3d手法
7	須恵環	(12.2)	4.0	(9.0)	C片	A	暗灰色	20%	覆土。末野産
8	須恵環		1.9	6.8	B C片	A	紫灰色	65%	No12-13. 床面。末野産。底部B3b手法
9	須恵蓋		2.1		片	B	黄褐色	90%	覆土。末野産。つまみ径3.7cm
10	須恵蓋		1.9		C片	C	黄灰褐色	90%	No8. 覆土。末野産。天井部外面「O」刻印あり
11	須恵蓋	(18.0)	2.9		C片	A	灰色	20%	No4. 覆土。末野産
12	須恵高台椀		6.2		C片	A	青灰色	30%	No11. 覆土。末野産。底部糸切り痕残る
13	須恵高盤	(19.4)	1.9		C F	B	灰色	10%	覆土。末野産か。口径大きい
14	須恵高盤		8.4		C G片	C	灰褐色	60%	No15. 覆土。末野産か。脚部2本1組の沈線4単位施文
15	須恵脚付盤		2.0		C片	B	明灰色	80%	No6. 床面。末野産
16	須恵短頸壺	(13.0)	3.6		B C	A	青灰色	15%	覆土。末野産と思われる
17	須恵長頸瓶		6.5		C針	A	灰色	40%	No7. 覆土。南比企産
18	須恵脚付瓶か		2.3	(9.2)	B C	A	青灰色	15%	覆土。末野産か。瓶脚部か
19	須恵コップ形土器	5.3	4.9	4.6	C針	A	灰色	100%	No5. 覆土下層。南比企産
20	須恵甕	26.0	3.9		針	A	暗青灰色	5%	覆土。南比企産
21	須恵甕		4.4	(15.0)	C針	B	淡灰色	15%	覆土。南比企産
22	土製支脚	(12.0)	4.0		A B	A	淡褐色	25%	覆土
23	刀子	No1. 覆土。残長10.5cm。切先欠失							
24	不明鉄製品	No16. 覆土。残長15.0cm。棒状							
25	不明鉄製品	No17. 覆土。残長4.1cm。塊状。模か?							

超える比率で、南比企産が1割弱混じっていた。時期は熊野Ⅳ期と考えられる。

## A区第46号住居跡 (第72図)

第46号住居跡はA区北東部の38-18グリッドに位置し、東壁部は調査区外に延びている。平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸長4.70m、短軸長4.68m、深さ0.50mである。主軸方位はN-92°-Eを指す。

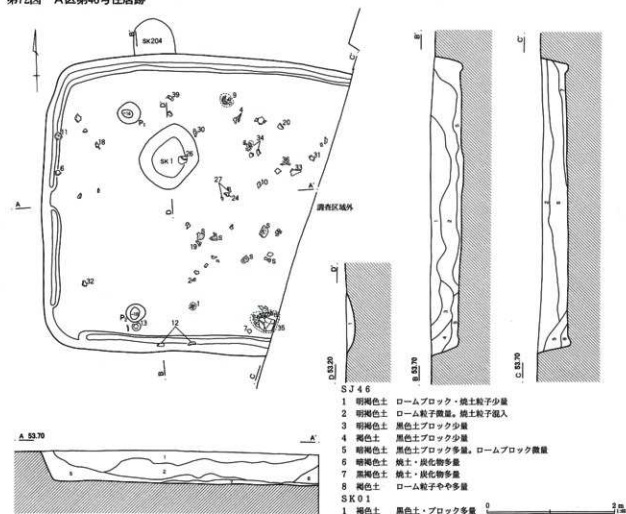
床面は概ね平坦で堅く踏み固められていた。埋土はきめ細かい明褐色土(第1・2層)、黒色土ブロック混じりの暗褐色土(第5層)を基調とし、床面上には焼土・灰・炭化物混じりの黒色土が堆積していた。

カマドは調査区内には検出されなかったが、埋土の状況からおそらく東壁に位置するものと推定される。ピットは2本検出されたが、柱穴と見るには浅い。土壌は1基検出された。上面に貼床されており、掘り方または床下土壌であろう。壁溝は一部途切れるが、ほぼ巡っている。

出土遺物は比較的多く、土師器環・皿・暗文環・壺・小型甕、須恵器環・椀・蓋・高台付環・高台椀・長頸瓶・円面硯・高盤・甕、鉄製品・土錘・砥石がある(第73・74図)。床面よりも浮いた位置から出土したものがほとんどである。床面近くから出土したものは第9の暗文環、35の小型甕、39の砥石がある。11の須恵器環は西壁、12・13は南壁直下から出土している。

土師器環は口縁部が内彎気味に開くもので、平底風の底部を作り出すもの(1)と弱い丸底風のもの(2-4)がある。7-10は平底暗文環。遺存状態の良い9の内面には放射暗文と螺旋暗文が施されている。11-20は須恵器環。16・20は混入である。11・12、15・17-19は末野産、13・14は南比企産で両者が共伴する。器形や調整技法は類似し、底部回転糸切り後、周辺部や体部下端を再調整している。21は南比企産の無台椀である。22-25は蓋。23は環G蓋で混入品。末野または群馬産と思われる。24は末野産の高台椀蓋、25は南比企産の椀蓋であろう。26・27

第72図 A区第46号住居跡



は末野産の高台椀。26は口縁部に内傾する面をもつ、しっかりしたつくりである。底部は糸切り痕をそのまま残す。27はやや薄手のつくりで、底部は回転ヘラケズリ調整されている。28は湖西産の高台坏(坏B)。混入である。29も湖西産の長頸瓶。混入。30は南比企産の円面硯。視面は摩滅している。脚部には刻線が僅かにみえる。31は末野産の高盤。口縁と脚部は接合しない。脚部は1段の方形透穴が2個残り、配置から全体で3方透しになるものと推定される。32は末野産の瓶類。

須恵器は破片数で165点出土した(混入品も含む)。内訳は、坏が93点(末野産69・南比企産23・湖西産1)、高台坏1点(湖西産)、無台椀1点(南比企)、高台椀8点(末野7・南比企1)、蓋25点(末野24・南比企1)、壺瓶類15点(末野14・湖西1)、高盤2

点(末野)、円面硯1点(南比企)、甕19点(末野17・不明2)である。時期は熊野Ⅲ期新相中心と考えられる。

#### A区第47号住居跡(第75図)

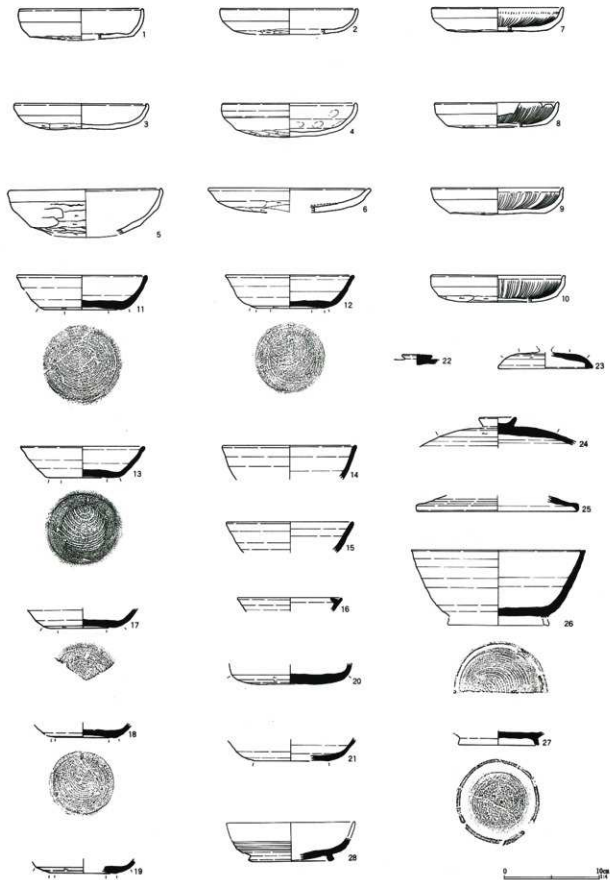
第47号住居跡は46・47-11グリッドに位置する。東壁部は町教育委員会によって調査されている。重複遺構との新旧関係は、第48・49号住居跡を切り、第42・44号住居跡に切られていた。また、第5号溝跡が覆土上層を南北に貫通している。

平面形は長方形と推定される。残存規模は長軸長5.46m、短軸長4.20m、深さ0.42mである。主軸方位はN-5°-Eを指す。

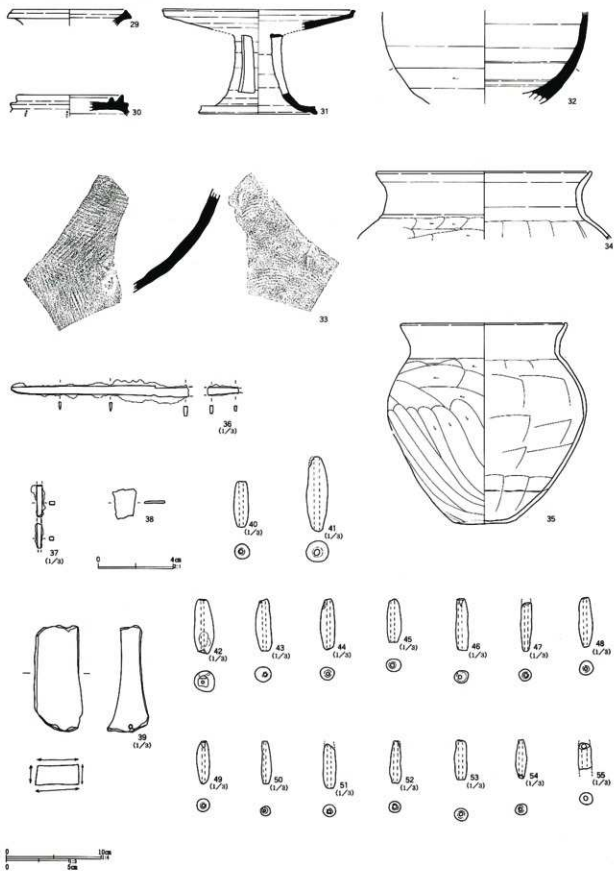
床面は第49号住居跡上にあるため、部分的に陥没しており、一定しない。西壁部は第48号住居跡とほぼ同一レベルで立ち上がりは平面的に確認できな



第73图 A区第46号住居跡出土遺物(1)



第74图 A区第46号住居跡出土遺物(2)



第34表 A区第46号住居跡出土遺物観察表(第73-74図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(13.0)	3.3		A D	A	褐色	15%	№14. 覆土上層
2	土師環	(14.5)	2.7		A B	A	褐色	25%	№15. 覆土上層
3	土師環	(14.0)	2.7		A B	B	淡褐色	25%	覆土
4	土師環	(14.0)	3.6		A B C	A	褐色	25%	№34. 覆土上層
5	土師碗	(16.0)	4.7		A B C	A	明褐色	15%	覆土
6	土師皿	(17.0)	2.5		B C	B	茶褐色	10%	№6. 覆土上層
7	土師咄文環	(13.8)	2.5		B C D	B	赤褐色	30%	№57. 覆土下層。内面放射咄文。見込部磨滅
8	土師咄文環	(13.0)	2.6		B	A	茶褐色	15%	覆土。内面放射咄文
9	土師咄文環	13.8	2.8	10.1	B D	B	茶褐色	90%	№33. 覆土下層。内面放射十線旋咄文
10	土師咄文環	(14.0)	2.8		B C	B	茶褐色	25%	№45. 覆土上層。内面放射咄文。見込部磨滅
11	須恵環	(13.6)	3.7	8.1	D片	B	灰色	60%	№3. 覆土上層。未野産。底部B3d手法
12	須恵環	13.6	3.5	7.3	B D	C	褐色	100%	№12-13. 覆土下層。未野産。底部B3d手法
13	須恵環	13.0	3.3	7.5	B針	B	灰色	80%	№10. 覆土下層。南比企産。底部B3b手法
14	須恵環	(14.0)	3.6		B針	A	灰色	10%	覆土。南比企産
15	須恵環	(13.3)	3.3		D	B	褐色	15%	覆土。未野産
16	須恵環	(10.8)	1.5		B	A	灰色	10%	覆土。湖西産。坏H
17	須恵環		2.0	(7.0)	B D	C	濃褐色	25%	覆土。未野産。底部B3d手法
18	須恵環		1.6	6.6	B片	B	灰色	100%	№4+№5. 覆土中層。未野産。底部B3b手法
19	須恵環		1.5	(7.0)	D片	B	淡灰色	20%	№20. 覆土上層。未野産。底部B3d手法
20	須恵環		2.2	11.4	B片	B	灰色	25%	№36. 覆土中層。未野産。底部A3c手法
21	須恵碗		2.3	(8.0)	針	A	淡灰色	20%	覆土。南比企産。底部回転ヘラケズリ
22	須恵蓋		1.0		B片	A	濃灰色	100%	覆土。未野産?
23	須恵蓋	(9.7)	1.8		B片?	A	灰色	10%	覆土。未野産または群馬産か
24	須恵蓋		3.2		片	D	灰褐色	20%	№27. 覆土上層。未野産
25	須恵蓋	(17.0)	1.6		B針	A	青灰色	5%	覆土。南比企産
26	須恵高台碗	(18.2)	7.1		D片	B	灰色	35%	№29. 覆土上層。未野産
27	須恵高台碗		1.4	8.5	B F片	A	灰色	100%	№28-62. 覆土下層。未野産。底部回転ヘラケズリ
28	須恵高台環		2.4	(8.0)	B	B	灰白色	10%	覆土。湖西産。やや軟質で、体部に沈線3条走る
29	須恵長頸瓶	(12.0)	1.6		C片	B	灰白色	5%	覆土。湖西産
30	須恵円面碗		2.2		B針	A	灰白色	30%	№30. 覆土上層。南比企産
31	須恵高盤	(20.0)	(11.0)	(11.2)	片	D	灰色	35%	№42. 覆土下層。未野産。脚部透孔は3孔と思われる。
32	須恵釜		9.6		B C D片	D	黒灰色	35%	№9. 覆土下層。未野産
33	須恵甕		10.4		B D	B	灰褐色	80%	№43. 覆土下層。未野産。外面平行叩き。内面当具攪り酒し
34	土師釜	(22.5)	7.1		A B	A	赤褐色	45%	№38-40. 覆土上層
35	土師甕	17.4	20.1	6.6	A B	A	赤褐色	75%	№59. 覆土下層
36	刀子								№44. 覆土下層。残長16.6cm。研ぎべり顯著。
37	不明鉄製品								覆土。残長4.5cm。棒状。
38	不明鉄片								覆土。縦1.5cm。横1.2cm。厚さ0.1cm
39	砥石								№32. 覆土下層。長さ8.3cm。重さ105g。灰白色。四面とも使用され平滑。側面穿孔があるが貫通しない
40	土師								覆土。長さ3.6cm。最大径1.1cm。孔径0.3cm。重さ4.88g。胎土B C。焼成A。淡褐色。残存100%
41	土師								覆土。長さ5.8cm。最大径1.75cm。孔径0.45cm。重さ14.87g。胎土A B D。焼成A。褐色。残存95%
42	土師								覆土。長さ4.3cm。最大径1.55cm。孔径0.2cm。重さ10.5g。胎土B C。焼成B。褐色。残存ほぼ100%
43	土師								覆土。長さ4.1cm。最大径1.2cm。孔径0.3cm。重さ5.93g。胎土A B C。焼成B。黒灰色。残存ほぼ100%
44	土師								覆土。長さ4.0cm。最大径1.1cm。孔径0.25cm。重さ5.16g。胎土B D。焼成A。褐色。残存100%
45	土師								覆土。長さ3.4cm。最大径1.1cm。孔径0.3cm。重さ3.9g。胎土B C。焼成B。黒色。残存ほぼ100%
46	土師								覆土。長さ4.1cm。最大径1.05cm。孔径0.3cm。重さ4.13g。胎土B C。焼成A。褐色。残存95%
47	土師								覆土。長さ3.9cm。最大径0.95cm。孔径0.3cm。重さ3.27g。胎土B C。焼成B。黒灰色。残存95%
48	土師								覆土。長さ3.9cm。最大径1.1cm。孔径0.25cm。重さ4.26g。胎土B C D。焼成A。淡褐色。残存100%
49	土師								覆土。長さ3.3cm。最大径1.0cm。孔径0.2cm。重さ3.06g。胎土B C。焼成B。黒灰色。残存ほぼ100%
50	土師								覆土。長さ3.4cm。最大径0.8cm。孔径0.2cm。重さ2.01g。胎土C。焼成B。茶褐色。残存100%
51	土師								覆土。長さ3.4cm。最大径1.0cm。孔径0.3cm。重さ3.42g。胎土B C。焼成B。黒灰色。残存95%
52	土師								覆土。長さ3.3cm。最大径0.9cm。孔径0.3cm。重さ2.08g。胎土B C。焼成B。褐色。残存95%
53	土師								覆土。長さ3.1cm。最大径1.05cm。孔径0.3cm。重さ3.17g。胎土B C。焼成A。褐色。残存100%

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
54	土罐	覆土。長さ3.05cm。最大径0.9cm。孔径0.3cm。重さ1.75g。			胎土B.C.	焼成A。	褐色。	残存ほぼ100%	
55	土罐	覆土。長さ2.1cm。最大径1.0cm。孔径0.35cm。重さ2.31g。			胎土B.C.	焼成B。	黄褐色。	残存ほぼ100%	

った。埋土は黒褐色土を基調としており、特に埋め戻されたような痕跡は認められなかった。

カマドは北壁の東端に設置されていた。燃焼部は壁外に掘り込まれ、先端は急角度で立ち上がる。側壁上部は強く被熱していた。袖はあまりしっかりしたものではないが、灰褐色粘質土を積み上げて構築されていた。第1・2層が天井崩落土、第3層が灰層、第4・5層が掘り方埋土である。底面（火床

面）上にはほぼ完形の土師器甕が倒立状態で遺存していた。

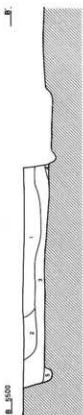
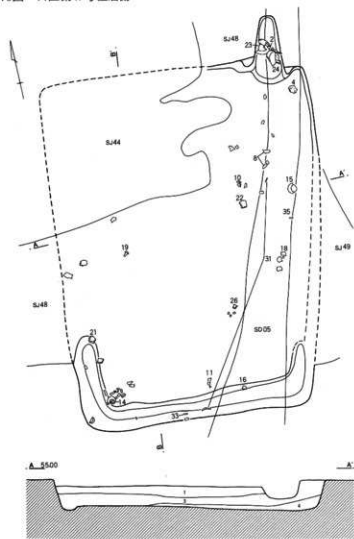
ビッドは検出されなかった。壁溝は南壁部に検出されたが、あまり明確とはいえない。

出土遺物は土師器環・暗文環・皿・甕・鉢・台付甕、ミニチュア土器、須恵器環・蓋・長頸瓶・甕、鉄製品がある（第76・77図）。全体的に床面よりも浮いた遺物が多い。14の須恵器環は南西コーナー部の

第35表 A区第47号住居跡出土遺物観察表（第76-77図）

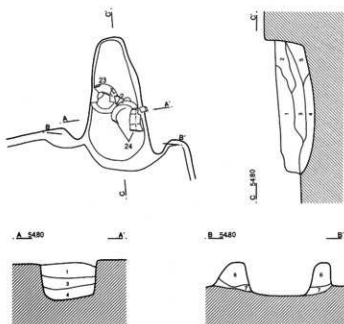
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	10.2	2.7		ABC	A	褐色	20%	覆土
2	土師環	(12.5)	2.9		ABCD	A	淡褐色	20%	カマドNo17
3	土師環	(13.6)	3.2		ABC	A	褐色	30%	覆土。内面指押痕
4	土師環	12.3	3.1		ABCD	A	褐色	60%	No40。覆土下層
5	土師環	(13.4)	3.4		ABC	A	淡褐色	15%	覆土
6	土師皿	(16.8)	3.0		ABC	A	明褐色	5%	覆土
7	土師暗文環	(14.8)	3.1		ABCD	A	褐色	25%	覆土。内面放射暗文
8	土師暗文環	13.0	2.8		ABCD	A	褐色	55%	No5+No7+カマド。内面放射暗文+ラセン暗文
9	土師暗文環	(14.0)	3.0		G	A	明褐色	15%	覆土。内面放射暗文
10	土師暗文環	(12.6)	3.7		AH	A	明褐色	15%	No11。覆土中層。内面放射暗文
11	土師暗文環	16.4	4.4		ABCD	A	明褐色	20%	No13。覆土中層
12	須恵蓋		1.2		BCD針	A	灰色	80%	覆土。南北企度。つまみ径4cm
13	須恵蓋	(16.7)	2.5		BC片	B	灰白色	5%	覆土。未野産
14	須恵環	13.8	3.6	7.7	BCE	A	灰色	70%	No5。床面。未野産。底部3c手法
15	須恵環	13.3	3.3	7.2	BE針	A	灰色	65%	No24。覆土中層。南北企度。底部B3c手法
16	須恵環	(14.2)	3.0	9.4	BC針	B	灰白色	30%	No12。覆土下層。南北企度。底部3a手法
17	須恵環	(16.0)	3.9		BCE	B	灰色	5%	覆土。未野産。底部回転ヘラケズリ
18	須恵環		1.2	9.2	BCE針	B	茶褐色	25%	No22。覆土下層。南北企度。底部3a手法
19	須恵環?		1.7	(8.8)	BCDE	A	灰黒色	30%	No28。覆土下層。産地不明(群馬?)底部A3c手法
20	須恵長頸甕		7.4		BCE	A	灰色	20%	覆土。秋間産?
21	須恵蓋		10.2	(14.2)	BCE片	A	暗灰色	25%	No3。覆土中層。未野産。胴部下端+底部ケズリ
22	須恵甕				BCE	A	灰色		No25。覆土上層。未野産
23	土師甕	21.3	28.0	4.8	ABCD	A	明褐色	95%	カマドNo19
24	土師甕	20.0	6.6		ABCD	A	褐色	80%	カマドNo15、No16
25	土師甕		8.9	(7.0)	ABCE	A	褐色	15%	覆土
26	土師甕		3.5	4.7	ABCD	A	褐色	50%	No18。覆土下層
27	土師台付甕?	(10.6)	3.3		ABCD	B	褐色	10%	覆土
28	土師台付甕		3.4		ABCD	B	褐色	70%	覆土
29	土師台付甕		2.0	(11.0)	BC	A	暗褐色	25%	覆土
30	土師ニ+7	3.8	2.9		ABC	A	淡褐色	25%	カマド
31	刀子	No8-11。覆土上層。残長16.3cm。接合しない同一個体。							
32	刀子	覆土。残長6.5cm。柄部。木質付着							
33	刀子?	No9。覆土中層。残長4.5cm。刀子刀部片か							
34	釘	覆土。残長2.7cm。							
35	鉄塊	No23。覆土下層。不用品。長さ1.6cm。幅3.5cm。厚さ1.8cm							

第75図 A区第47号住居跡



- SJ47
- 1 黒褐色土 ローム粒子・砂粒混入。焼土粒子・炭化物粒子微量
  - 2 黒褐色土 ローム粒子・砂粒混入。焼土粒子・炭化物粒子微量  
暗褐色土のブロック混入
  - 3 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・ロームブロック少量
  - 4 黒色土 焼土粒子・炭化物粒子少量。ローム粒子少量
  - 5 黒褐色土 燐質土・ロームブロック混入

0 2m



- カマド
- 1 褐色土 焼土粒子多量
  - 2 褐色土 焼土ブロック少量
  - 3 黒褐色土 灰・炭化物・焼土粒子混入（灰層）
  - 4 褐色土 焼土少量
  - 5 暗褐色土
  - 6 灰褐色粘質土 焼土粒子・ローム粒子少量
  - 7 灰褐色粘質土 暗褐色土・ローム粒子多量

0 1m